
召喚魔王

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚魔王

【Nコード】

N1933J

【作者名】

海土龍

【あらすじ】

ある日、突然、悪魔ラウムによって、魔界に召喚されてしまった。

そして、何らかの理由で死んでしまった魔王の死を隠す為に、魔王の振りをしなければならぬことになり……。

いったい、誰が魔王を殺したのか。

一番疑わしい者は、誰？

他の悪魔達に偽者だとバレずに、生きて、人間界に帰ることができるだろうか。

1 紫雲

呼ばれた気がして、窓の外を見やった。

当然のことだが、そこに人の姿はない。

教室は三階に位置し、視線を下方に移動させれば、無人のテニスコートが見えた。

不意に太陽が陰る。

暗くなった空に目を向けると、分厚い雲が空を覆っている。紫帯びており、何やら不気味だ。

上空の風は強いのか、ビデオを早送りになっているかのように、雲が蠢うごめいている。

キラリ。

一瞬、雲の中で何かが輝いたように見えた。鏡を反射させたかのような光がもう一度。

（なんだろう？）

飛行機だろうか、目を凝らす。けれど、光はそれっきりだった。

肩を叩かれた。

振り向くと、少女が鞆を手に立っていた。

長い黒髪を二つお下げにし、大きな瞳で見つめてくる。

彼女は私に向かって小首を傾げた。

「帰らないの？」

言われて気付く。

いつの間にか、ホームルームは終わっていて、他のクラスメイトたちの姿は教室から消えていた。

「帰るよ」

「そう」

大きな瞳が伏せられる。

その憂いを帯びた表情に今度は私が首を傾げた。

「どうしたの？」

「好きなの」

「え」

怪訝な表情を浮かべてしまう。

何が？ と聞き返すと、彼女は腕をまっすぐに伸ばし、私を指差した。

「好き」

「……」

「すごく好き。私だけのものにして、誰の目にも触れさせたくないわ」

彼女の瞳を凝視する。

ふざけているのかと思ったが、彼女の瞳は真剣そのものだった。

「あの……」

何か応えなければと、戸惑いながら口を開いた。

けれど、私の言葉を遮るように、彼女が頭を左右に振った。

「分かっているの。あなたは私だけのものにはなってくれない。私がどんなにあなたを愛していても」

彼女の気持ちにまったく気付いていなかったわけではなかった。

出会ったのは高校の入学式後。
そう遠い昔のことではない。

けれど、明るくて甘え上手な彼女に私はすぐに打ち解けて、校内どこに行くのも常に一緒に行動した。

いろんなことを話したし、いろんなことを2人で試した。

親友だと思っていた。

だから、彼女が時々浮かべる切なげな表情に、気付いていても、
気付いていない振りをした。

親友のままでいたかったから。

と同時に、これ以上、彼女に囚われたくないと思っていた。

私は彼女だけのものにはなれない。

彼女の気持ちのすべてに応えることができないのだ。

「じめん」

謝るしかできない私に、彼女は歪んだ笑みを浮かべた。

「ひどい人ね。でも、そこがいいの。悔しくて、憎みたくなくなるけれ

ど」

「……………」

「嫌いよ。あなたが私以外の人を見つめる度に、私はあなたのその瞳をえぐりたくなるの。恨めしいわ。あなたが私以外の人と話をする度に、私はあなたの唇を縫い付けたくなるの。……いっそ、あなたを消してしまいたいわ」

再び、彼女は頭を左右に振った。

己の考えを打ち消すように。

「もう帰るわね。また明日」

彼女は、くるりと背を向け、軽く手を振って教室を出て行った。

その背を、私は何とも言い難い気持ちで見送った。
胸にずしりと重い石を乗せられたようだった。

（帰ろう）

独り取り残された教室を眺めて、机の横に掛けてある学生鞆を手にした。

それから、ふと窓の外に目を向ける。

（夕立でも来るのかな）

やはり外は暗い。

まるで夜だ。

放課後だとは言え、真冬でももう少し明るい。

完全に沈んでいない太陽の光を受けて教室は赤く染まり、東の空から次第に紺色が迫ってきてようやく夜になるものだ。

まして今の季節は、初夏。

この暗さは普通ではない。

キラリ。

再び何かが輝いた。

分厚い雲に目を凝らしたその時、足下の床が消えた。

物にしがみ付く間も、ただ驚く間さえなく、私の体は下へ下へと落ちていった。

2 木棺

カビ臭い。

耐え難い悪臭に、私は飛び起きた。

ガッン。

額を何かでぶつける。

痛みに顔を歪めながら辺りを窺うと、どうやら堅い板の上に寝かされているようだ。

辺りは闇。

瞼を開いているはずなのに、それを疑いたくなる暗さだ。

右手を上には伸ばせば、伸ばしきれない内に何かに触れた。
板のようだ。

さらさらとした木目を感じる。

ずいぶん低い天井を確認してから、次は左右に両腕を伸ばしてみた。

ほんの僅かに広げただけで壁があった。

板の上にいるのではなく、狭い空間に閉じ込められているらしいと分かった。

私は天井の板に両手を着くと、思いつきりそれを押し上げた。

ガタン、と音が響く。

板は鈍く動き、指三本分くらいの隙間を作った。

光が差し込んでくる。

目を細め、両足も使いながら力の限り押しやった。

大きな音を響かせてそれは床に沈んだ。

上体を起こし、改めて辺りを見渡した。

（ここ、どこ？）

古い教会のようだ。

けれど、それにしても十字架が一つも見あたらないし、どこか陰気だ。

高い天井に描かれた絵はくすんでおり、それを支える柱はひびが入っている。

窓を飾るステンドグラスは割れており、ほとんど原型が分からない。

広い空間だ。

その中央に大きな黒い箱が置かれていて、私の体はそこにある。

カビの臭いは箱から漂ってきているのだと気付いて、そこから這い出た。

不吉な予感がした。

つい先程まで閉じ込められていた箱を見下ろし、絶句する。

棺ひつぎだ。

この黒光りする大きな箱は間違いなく木棺もっかんだった。

（なんで私、こんなところに入っていたんだろう？）

訳が分からない。

教室にいたはずなのに…。

その教室の床が突然抜けて、転落したことを思い出した。
では、ここは教室の下？

（んなわけがない！）

すぐに否定する。

学校の真下に、こんな教会みたいな建物があるはずがないのだ。

おそらく、落ちた後、何者かに運ばれたのだろう。

（なんのために？）

いや、そもそも、教室の床が抜け落ちるということが起こり得ることなのだろうか。

とんでもない大惨事だ。
無傷で済むはずがない。

全身を見渡してみた。

痛むところも無ければ、擦り傷ひとつ無かった。

では、夢だったのだろうか。

そして、今も夢の中をさまよっているのだろうか…。

混乱する頭を整理しようと、額に手を置いた時だった。

「まあ！」

甲高い声が響き、弾かれたように振り返った。

少女だ。

腰まである黒髪を二つお下げにして、私に向かって満面の笑みを浮かべている。

私は勢いに押されるように後ずさった。
踵が床を打つ音が、広い空間に反響した。

「素晴らしいですね。まさか成功しちゃいますなんて！ 初めまして。わたくし、ラウムという者です」

少女は、私の両手をぎゅっと握り締めると、けたたましく名乗った。

そして、次から次へと耳を疑うような言葉を吐き散らした。

「この度は魔界へようこそお越し下さいました。わたくしもまさかわたくしごとき者の召喚術が成功するとは思っても寄らず、あなたが棺から出てこられて、ビックリ、ドッキリですわ」

更に言い募ろうとしたラウムを、私は片手で制する。

（ちょっと待て。今、なんて言った？）

『魔界』と聞こえたようだし、『召喚』とも聞こえたようだ。

その意味を理解しようと努力に努力を重ねながら、私はラウムに聞き返した。

「ここ、魔界？」

「はい」

「あなたが私をここに連れてきたの？」

「はい、召喚しました」

ラウムは、けろっとした表情で答えた。
まったく悪びれる様子がない。

絶句する。

だが、いつまでも、彼女の笑顔を黙って眺めているわけにもいかず、私は肺いっぱい空気を吸い込んだ。

「今すぐ私を元の場所に帰せ！」

「嫌です！」

荒げて言えば、相手も声を荒げてくる。
思わぬ反撃に私の方が怯んでしまう。

そして、更に追い打ちをかけるように、ラウムは潤んだ瞳で見つめてきた。

私は閉口した。

「せっかく術が成功したのに……。わたくし、召喚術は苦手なんです」

「いや、そんな苦労、聞いてないから」

泣かれると、弱い。

自分の方が悪いような気がしてくる。

しかし、ここで負けるわけにはいかない。

いきなり魔界に連れてこられたのだ。

よりにもよって魔界！

魔界がいつたいどういう場所なのか知らないが、どうせ、ろくでもない場所に決まっている。

（一刻も早く帰らないと！）

ラウムは、泣いてもダメだと悟ったようで、今度は怒ったように頬を膨らませた。

やや逆ギレ気味だ。

「困るんです！ あなた様にはここにいて頂かないと途轍もなく困るんです！ 実は先日、我が国の魔王陛下が隠居を決められました、その後継をお選びになれました。我が君です！」

熱く語り出された話はどう考えても自分とは関係なさそうで、私は、ふん、と鼻を鳴らした。

そんなことよりも帰してくれ、という言葉が喉元で堪えながら話を聞いていると、急にラウムの声が低まった。

「ところが、我が君が即位され大喜びしていた矢先のこと。我が君が突然お亡くなりになってしまったのです。このことが他の王子たちに知られれば、王位を巡って我が国は血で血を洗う争いとなってしまいます。そして、それだけならまだしも、他国に隙を付かれ、国を乗っ取られるということにもなりかねません」

「へえ、大変だね。 だけど、それが私とどういう関係があるの？」

痺れを切らせて聞いたのだが、ラウムはあくまでマイペースに話を続けるらしい。

私の疑問には一切触れず、そこで、と言葉を続けた。

「わたくしは内密に陛下の死をお知らせする手紙を先王陛下宛に送りました。その手紙が先王陛下に届き、先王陛下が新たな後継者をお選びになるまで陛下の死を隠すことにしたのです。ですが、わたくしの使い魔が先王陛下の元にたどり着くまで数日の時間を必要とします。その間、陛下の姿がまったく見られないとなれば疑う者も現れましょう」

そこで、とラウムは人差し指を私に向けて言い放った。

「陛下そっくりの者を召喚することにしたのです」

（まさか）

嫌な予感は的中するもので、ラウムは元氣良く、はい、と頷いた。

「あなた様こそ陛下のそっくりさんです！」

冗談じゃない！

なぜ魔王が、ごく普通の女子高校生とそっくりな顔をしているんだ？

あり得ない！

だが、ラウムは更にあり得ない言葉を続けた。

「お願いします。しばらくの間で良いので、陛下の身代わりを努めて下さいませんか？」

「無理」

即答だ。

当たり前だろう。

考える余地もない。

むしろ私は、即答せずに僅かでも考えることのできる人の方を尊敬する。

「さつさと、私を人間界に帰せ！」

「……」

強く言い過ぎたのか、ラウムは押し黙った。

それから、彼女はやや俯き、暗くした表情の奥でキラッと妖しく瞳を輝かせた。

「そうまでおっしゃるのなら仕方ありませんわね。わたくしはせっかく召喚できたあなた様を人間界に帰すつもりは、これっぽちもございせん。他の悪魔に頼むか、魔界でのたれ死んでください」

「はあ？ 何？ 冗談でしょ？」

あんまりのことに聞き返せば、ラウムはにっこりと笑った。

「本気です」

その語尾にハートマークでも付いていそうな響きに絶句する。そして、更にハートを撒き散らしながら彼女は言った。

「どうなさいますか？ わたくしに従い、陛下の身代わりを務めた

後、無事に人間界に戻るか。それとも、魔界の魔物に食われるか。この辺りは意地汚い魔物が多いので、頭からバリバリ、骨まで残さず食べられますわよ？」

「卑怯な！」

「悪魔ですから」

そうか、と妙に納得してしまう。

ここが魔界なら、この目の前にいる少女が人間のはずがなく、悪魔であっても何ら不思議ではない。

と言うか、悪魔相手によく今の今まで自分は平然と会話をしていたものだと感じする。

とにかく、ここは魔界で、この悪魔の言うとおりに魔王の身代わりになるしか五体満足で元の世界に戻る方法はないらしい。

私はため息一つ付いて、ラウムに従う意思を示した。

3 魔王城

何一つイメージに違わずそれは佇んでいて、私はあんぐりと口を開けて、それを見上げた。

蔦が這い、苔の覆われた城壁。

錆びた鉄の城門は無駄に大きく、大人の身長のお五倍はありそうだ。

紫色の空に赤と青の二つの月が浮かび、それらを覆い隠すように桃色の雲が長く薄く浮かんでいる。

「ここが……」

「魔王城ですわ」

「やっぱし？」

こんな不気味な城になど入りたくない、と駄々を捏ねても無駄であることは、ラウムの表情を見れば分かる。

彼女は私の腕をガッチリ掴んで城門をくぐった。

石畳の上を行くと、アーチ状の門が現れて、その奥まったところに大きな扉がある。

ラウムが軽く手を触れると、扉は自然に開き、鈍い音を響かせた。

「陛下！」

まさに扉が開いたとたんだ。

その顔を見せるより早く声が駆け寄ってきた。

「陛下、いったいどちらにいらしたのですか？　ずっとお捜ししていたのですよ」

青みかかった黒髪に、瑠璃色の瞳。

すらりと背が高く、床まで届く長いローブを着込んでいる。

「…誰？」

「オセ様ですわ」

「だから、誰よ？」

顔を近付けてラウムに訊けば、彼女の答えはちっとも要領を得ない。

名前を聞きたいのではなく、彼はどのような立場にある人で、自分はどのように彼に接すればいいのか、ということを聞きたいのだ。もう一度、ラウムに問い質そうとした時だ。

オセの腕がぬつと伸びてきて、私の肩をがしつと掴んだ。

「執務のお時間です。直ちに執務室にいらしてください」

「へ？」

「さあ、行きますよ」

「ちよつ！待っ！！」

否と言う暇もない。

腕を掴む力は強く、抵抗を許さない。

また、私の方も、下手なことを口にして、この優男に人間だとバ
れてしまうことを恐れ、おとなしく従うしかなかった。

半ば引きずられながら城の奥へ奥へと移動する。

この魔王城は、外観はああだが、内装はそれほどでもないという
ことが分かった。

薄暗く、蜘蛛の巣が張り巡らされている様子を覚悟していたが、
照明は予想外にも明るい。

巨大なシャンデリアが高い天井から吊り下げられており、掃除の
行き届いた廊下は蜘蛛の巣どころか鏡のように輝いている。

そして、連れてこられた執務室は、いかにも偉い人が使っていそ
うな豪華さで、床に敷かれた絨毯の模様の細かさや、革のソファの

艶やかさ、黒光りする机の装飾などは、見ただけでテンションが上がる。

執務机の前に座らされると、オセに視線だけで机の上を指し示された。

きれいに重ねられている書類をチラ見して、再びオセを仰ぎ見た。にっこりと笑顔を送られる。

どうやら、この書類を片付けると言いたいらしい。

（片付けろって言ったって…）

もちろん棚や机の引き出しに仕舞えという意味ではない。魔王として執務をこなせ、ということなのだろう。

（ていうか、魔王って、机に向かって執務とかするんだ？）

そこらへんは、人間の王様と事情が同じのようだ。悪魔の王にも王としての責務があるらしい。

てつきり悪魔は無秩序で、思うがままに遊んで生きているのかと思っていたから、驚きだ。

（できないとか言ったら、偽者だってことが一瞬でバレてしまうん

だろうなあ)

執務の邪魔だからと、ラウムはオセによって廊下に締め出されている。

助けは期待できない。

(魔王の執務がどんなもんだか知らないけど、やるっきゃない!)

私は投げやりな気分で、書類をパラパラと指先で捲ってみた。

(あれ?)

意外や意外。

行儀良く並んでいる文字は漢字だ。

悪魔と聞けば欧米をイメージするので、てっきりアルファベットの羅列かと思っていた。

平仮名はないので日本語ではないらしいが、漢字ならば何となく意味は分かりそうだ。

(『殺人間数於壹年』?)

読めそうな一文に視線を落として、親指の爪を前歯に当てる。

（殺人、間数……。違うな。人間を殺す数、一年に於いて？ つまり『一年において殺す人間の数』って意味かな。おおっ、読めた！）

やったあ、と机の下で、こっそり拳を握る。

けれど、なぜ漢字なのだろうか。

特にラウムは日本の高校に通っていても違和感がないように思う。

（日系悪魔とか？）

首を傾げながら私は羽ペンを手にした。

『殺人間数於老年』の下に数字を書く形式になっている。

おそらくこの書類は、悪魔が一年間でどれくらい人間を殺すのかを決める書類なのだろう。

ここは人間としてゼロ以外の数字は書きたくないところだ。

「よし、ゼロで！」

ほとんど丸。

勢いよくゼロと書いてやると、オセは驚いたような表情を浮かべた。

「今年は人間を殺さないんですか？ まったく？」

「うん。そう」

「そうですか。……それもよろしいかと」

大反対されるだろうと覚悟していたのだが、オセはすんなりと頷いて私を驚かせた。

「いいの？ 本当に？」

「ええ。実は以前から考えていたのですが、無益に命を奪うのはどうかと……」

悪魔ならば、殺戮してなんぼ、人間を殺したくて仕方がないだろうと思っていたので、オセのその言葉に耳を疑う。

（へえ。悪魔にも博愛主義者っているんだ？）

意外だけど、悪くはない。

私は涼しげな顔を仰ぎ見た。

彼の仕草は豹のようにしなやかで、体重を感じさせない。
年齢はいくつくらいだろうか。

二十代前半？

落ち着いた雰囲気からして、もう少し大人な気がする。

(いやいや、ちょっと待てよ…)

相手が悪魔であることをすっかり失念してしまった。

悪魔の年齢の数え方は知らないが、おそらく彼が二十数年しか生きていないってことはないと思う。

二百歳ってことはあり得るかもしれないが。

意味が分かりそうな漢字から読み進めていって、何枚目かの書類に取りかかろうとしていた時だった。

コンコン、と軽い音が響いた。

「失礼致します」

扉が開き、ラウムがメイドのような格好をして現れた。
ティーセットを乗せたワゴンを引いている。

「なんですか？ 陛下は執務中です」

「休憩も必要だと思ひまして。それに、ベリス公がお見えなのです」

さつとオセの顔が曇った。

なぜ急に、と独り言のように呟く。

「陛下、わたしが参ります。ですから、陛下は引き続き執務をなさ
つていてください」

オセは慌ただしく執務室を出て行った。

4 秩序

オセの足音が聞こえなくなると、ふふっとラウムが笑みを漏らした。

「行きましたわね」

ワゴンからティーカップを取り出すと、私の目の前でお茶を入れてくれる。

香りや色を見る限り紅茶らしい。

けれど、私としては、のほほんと紅茶を飲んでいる場合ではない。

「ラウム。ちゃんと説明してよ。まず、オセって何者？」

「オセ様は陛下の一番の側近で、陛下の執務のお手伝いをされている方です。また、我が国の軍事を掌握なさっています。怒らせたら面倒なことになりますよ」

軍事権を所持している秘書官ということか。

魔王はよほど彼を信頼していたらしい。

と同時に、彼は魔王と近い関係だということだ。

（よくバレなかったなあ）

偽者だとバレてもおかしくない状況だったと思う。
彼が本物の魔王の人となりをよく知っているのなら、私のちよつとした仕草にも疑問を持つはずだ。

（オセに接するときは気を付けないと…）

それじゃあ、と言って、ラウムに視線を向ける。

「今、来たとかいうベリスって？」

「ベリス公ですわ。我が国の公爵の地位にあります」

「ふん。公爵…」

どうやら悪魔社会にも身分というものがあって、いろいろと複雑そうだ。

私は更に質問を重ねる。

「ラウムはよく、我が国、我が国の魔王陛下とかいう言い方をしますが、他にも魔王がいるの？」

「ええ、それはもう。魔界で王の地位にある方は九十九名いらっしやいます」

「そんなに？」

「いえ、ちゃんと数えた者がいないので、『とにかく大勢』という意味で九十九という数字を使っています」

「おいおい……」

なんて適当！

悪魔社会の何かを垣間見た心地になった。

ともあれ、魔王は大勢いるらしく、その魔王の数だけ国があるのだという。

そうだとすると、魔王だの、陛下だの言われていても大したことないのかもしれない。

考えが顔に出たのか、ラウムは大きく首を左右に振った。

「確かに名ばかりの王は大勢いますけど、陛下のお父上であらせられる先王陛下は王の中の王、大王と呼ばれる方でした。なので、その王子である陛下も一目を置かれた存在だったのです。皆がその誕生を祝い、皆がその美しさに賞賛の言葉を口にしました」

「へえ」

いまいち淒さは伝わらなかったが、とりあえず感心してみる。すると、ラウムは満足したらしく、ニコニコ笑みを浮かべながら

先程の話題に戻った。

「魔界にも秩序というものがあって、多くの王たちを束ねる皇帝陛下がいらつしゃいます。その下に皇帝直属の閣僚たちと將軍たち。そして、皇帝陛下がご自身と同等に扱われる方、すなわち、大公殿下がいらつしゃいまして、大公殿下が束ねる貴族の方々がいらつしゃいます。王の下にも、その王が支配する国の貴族がいて、順に、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵です」

ちなみに、とラウムは続けて、自分は伯爵の地位を貰っていると
言って話を締めた。

そんなことよりも、とラウムの顔が真剣なものに変わったのはその直後だ。

思わず私も姿勢を正した。

「なぜ急にベリス公がいらつしゃったか……ですわ。陛下の身に起きたことをご存じなのかもしれません」

「どういうこと？」

ベリスとやらが魔王が死んだことを知っていたからと言って何が問題なのだろうか。

首を傾げてから思い当たる。

魔王が死んだことはラウムと彼女の使い魔しか知らないはずなの

だ。

それをもしベリスが知っているとしたら。

「あんたの魔王は突然死んだと言ったよね？ 死因は？」

「それがよく分からないのです」

「殺された、ってことは？」

ラウムも視野に入れていたことだったらしく、彼女の瞳がキラッと妖しく輝いた。

「外傷はございませんでした。おそらく毒か呪い。何者かに殺されたのでなければ、ああも急にお亡くなりになるはずがございません！ ベリス公の突然の訪問。もしか…」

「ベリスっていう奴を疑ってるの？」

「めったにいらっやらない方なのです。それがこの突然過ぎる登城……。怪しいですわ」

「確かに」

ラウムの言葉に深々と頷くと、彼女は私の両手をがっしりと握った。

「くれぐれもベリス公やオセ様に偽者だとバレませんように。敵はどこに潜んでいるのか分かりません。それに向こうは陛下を殺したと思っています。ところが、目の前にご無事な陛下の姿がある。必ず焦り、行動に出るはずですよ」

ラウムの必死さは、握られた手の痛みから伝わってくる。けれど、私にとって、魔王が誰に殺されたかは、結構どうでもいい。

とにかく、五体満足で人間界に帰ることができたら、それでいいのだから。

「まあ。犯人捜しは、あんたに任せるよ。私はバレないように気を付ける」

「協力して下さいませんか？」

「十分協力してるでしょ？」

「ですが…」

ラウムは頬に片手を置いて、考え込む仕草をする。そして、瞳をキラリと輝かせ、にこやかに言い放った。

「敵をハッキリさせれば、あなた様の安全性は増しますわ」

「は？」

「先程わたくしは『必ず焦り、行動に出るはず』と申し上げました。つまり、犯人は再び陛下を殺そうとすると申したのです。陛下の身代わりであるあなた様は命を狙われます。あなた様は我が身が可愛くはないのですか？」

「何が言いたいの？」

「攻撃は最大の防御ですわ」

ニツコリと、語尾にハートマークを付けて、ラウムは可愛らしく言った。

「要するに、自分の身を守りたければ、犯人捜しに協力しろと言いたいわけね」

笑顔で脅してくる。

さすが悪魔だ。

私は肩を落としてため息を着いた。

仕方がない。

ここは魔界で、周りは悪魔だらけ。

自分の命が掛かっているのだ。

とにかく今は目の前の悪魔に従うしかない。

了解、と短く答えて私は片手を上げた。

5 紋章

ほのかに甘い。

紅茶特有の渋みはなく、まるやかな味のみが舌に残った。

のほほんと、紅茶を飲んでいる場合ではないと思いつつも、オセが戻って来るのを待っているうちに飲み干してしまった。

結局、オセは執務室に戻ってこなかった。

すると、ラウムは満面の笑みで手を打ち鳴らした。

執務は終了と言うのだ。

ラウムに促されて執務室から廊下に出る。

長い廊下をしばらく行くと、金色に大きく紋章が描かれた扉の前にたどり着いた。

聞けば、悪魔には個々に所有する紋章があつて、この紋章はこの部屋の主の紋章だと言う。

つまり、魔王の紋章だ。

「ここが陛下のお部屋です。御自由にお使い下さって結構ですわ」

部屋の中に入ると、ラウムはそう言ったが、人様の部屋だ。しかも、魔王。

使いづらいこと、この上ない。

私は部屋の中を点検するように歩き回った。

床に敷かれた敷物はたぶん動物の革だ。

なんの動物かっていうのはちょっと判断付かない。

高い天井には当然のようにシャンデリアが下がっていて、ただ広い空間を皓々と照らしている。

どうやら奥にももう一部屋あるらしい。

そちらは寝室となっており、中央に天蓋付きのベッドが置かれている。

いくつか並んだタンスの一つを何気なく開いてみる。

ずらりと並んだ服を確認しながら、そう言えばと思い至った。

「私、思いつ切り制服姿なんだけど……？」

学校から召喚されたのだ。

当然そのまんまの格好でここにいる。

「あんたたち悪魔は、この格好を見て何の疑問も湧かないわけ？」

オセは自分の主が女子高生の格好をしていても平然としていた。ラウムも着替えると言わない。

私はタンスから一着取り出すと、自分の体に当ててみた。

「これ、男物だよね？ 魔王って男？」

「ええ、まあ、そのようなものですけど？」

いまいちハッキリしない返事だが、今までの会話の中、ラウムは魔王に対して『王子』という単語を使っていた。

おそらく魔王は男なのだろう。

すると、つまり、私そっくりの男がいるというわけで、しかもその男はスカートを穿いていても疑問を持たれない人物なのだ。

「きっとオセ様は、いつものコスプレだと思われたのですわ」

「コスプレ！？ コスプレって……。あんたたちの魔王っていったい！」

悪魔もコスプレをするものなのか、という疑問よりも、さっぱり魔王像がイメージできなくてガツクリ肩を落とす。

廊下の方で軽い音が響いた。

ラウムが扉を開くと、オセが渋い顔で廊下に立っていた。

「失礼致します。ベリス公が陛下と晚餐をご一緒したいとの仰せで

す。すぐに食堂の方へいらして下さい」

「食堂に？ ベリスと一緒に食事をするの？」

「はい、そのように」

答えたあと、オセは眉を寄せる。

「なにか不都合でも？ ベリス公にお断わりいたしましょうか？」

「ううん、そういうわけじゃ……」

（ヤバイ。怪しまれた？）

そろりと、オセの顔を盗み見ると、彼は部屋にやって来た時同様、渋い表情をしている。

（あれ？）

もしかして、と思う。

オセは、魔王がベリスと食事するのを良く思っていないのかも。

私の視線に気付き、オセは柔らかに表情を弛ませた。

「何か？」

「うっん、何でもなし。食堂に行けばいいんだよね？ 分かった。すぐ行くよ」

「……承知致しました」

不自然な間をつくってから、オセは頭を下げた。
魔王としての対応を誤ったのではないかと不安になる。

ちらりと、ラウムに視線を向ける。

すると、彼女は己の手元を見つめて、表情を硬くしていた。
やはり、何か間違えたのだろうか。

だが、オセが部屋を出ていくと、ラウムは私の視線に気が付き、
ふわりと笑みを浮かべた。

「さっそくベリス公に探りを入れるチャンスが訪れましたね。しかし、陛下とベリス公は幼なじみ。ここ数百年は距離を置かれていたようですが、陛下をよく知る方です。くれぐれも気をつけて下さい」

「もし偽物だつてバレちゃったら？」

「殺されます！」

スパッと、まるでナイフで切り裂くように言い切ったラウム。

私は、ひいー、と口を横に引いて声なき悲鳴を上げた。
やはりベリスとの食事は断った方が良かっただろうか……。

6 晩餐

ラウムに案内されて食堂に向かう。

だが、魔王とベリスの晩餐に彼女は同席できないようで、食堂の入り口でラウムと別れ、私は薄暗い部屋の中へ、一人で足を踏み入れた。

食堂の中央に食卓。

それは無駄に長い机で、真っ白なテーブルクロスが敷かれており、金色の燭台が五つ、一定の間隔をあけて置かれている。

橙色の蠟燭ろうそくの明かり。

電気の明かりに比べて、雰囲気はあるが、どうも暗い。

そのため、私は、食堂で魔王を待ちわびていた人物にすぐに気付くことができなかった。

「陛下、お久し振りございます」

明るい声音が響く。

驚き、視線を向けると、赤毛の少年が私の足下に膝を着いていた。

同い年くらいに見えるが、この少年も悪魔なのだ、きっと見かけ通りの年齢ではないのだろう。

先程、ラウムは『ここ数百年』と言っていた。

さり気なさ過ぎて聞き流してしまったが、悪魔たちにとって数百年は『ここ』で言い表せる時間の内らしい。

すっかり年齢を聞いてしまったら、数百歳単位で答えられそうだ。

私は、跪くベリスをまじまじと見つめた。

背丈は才セほど高くはないが、けして低くはなく、腰に下げている大剣がよく似合っている。

真紅の瞳は大きく、どこかあどけなさがあった。

人好きのする顔だ。

馴染みやすい雰囲気がある。

というよりも、私はなぜか、彼に懐かしさを覚えた。

「しばらく足が遠のいていたこと、お許し下さい」

一通りの挨拶が済むと、ベリスは顔を上げた。

優雅な動作で立ち上がり、私のために椅子を引いてくれる。

高い背もたれの付いた木造の椅子。

見た目の硬さに反して、座ってみると、ふわりと包まれるように座り心地が良かった。

私がしっかりと腰を落ち着かせたのを確認してから、ベリスは食卓を周り、向かいの席に腰掛けた。

カラカラ、と食堂の奥の闇から音が響いてきた。

やがて、蠟燭の揺らめく灯りに照らされて、ワゴンを押して近付いて来る少女の姿が、闇の中から浮かび上がってきた。

少女は、私とベリスのグラスに真っ赤な飲み物を注いだ。

（まさかとは思っけれど、血……じゃないよ…ね？）

普通に考えたら、ワイン。

意表について、トマトジュース。

アセロラドリンクだったら、喜んで飲めるのだが、ここはあまり期待しない方が良く気がする。

「お待たせいたしました」

少女の声に視線を食卓に向けると、最初の料理が用意されていた。

私がグラスの中の液体を凝視している間に、並べてくれたのだらう。

その手際の良さに感心する。

私は料理に視線を落とした。

悪魔の食事なのだ。

どんなゲテモノ料理が出てくるだろうかと覚悟していたが、用意された前菜を見てホッと息を付く。

何かは知らないけれど、とりあえず見た感じ食べられそうな野菜のソテーだ。

カラカラと、再びワゴンを押して、給仕の少女は奥に下がっていく。

私はベリスと二人きりになった。

（ど、どうしよう）

ラウムには、ベリスに探りを入れてこいと言われているが、いったいどうやって探ればいいのだろうか。

目の前の悪魔に対して、どんな言葉を掛ければいいのか、さっぱり分からない。

（うつうつ。沈黙が怖い）

何か話さなきゃと、口を開くが、やはり何も思い付かなくて、口いつぱいに料理を詰め込んだ。

（お？）

まるやかな酸味が口の中にふわりと広がった。

それから塩気と、少しだけ辛味を。

口に含んだ料理は予想外に美味しかった。

パクパクと食べて、あっという間に一皿食べ尽くしてしまう。

すると、その頃合いを見計らっていたかのように、カラカラと音が響いてきた。

闇から、ワゴンを引いた少女が現れ、次の料理を並べて再び闇へと消えた。

（ヤバイ。このままだと、食べて終わってしまう！）

目の前の皿には、なんの肉だか分からないが、よだれの出そうなくらいに良い焦げ目のついた肉。

香りと、皿に滴る肉汁が更に食欲をそそる。

しかし、ダメだ！

このまま食べてばかりいては！

何か話さないと！

肉にナイフを通してながら、私はベリスに視線を向けた。

言葉が決まらないまま口を開く。

「あの…」

「突然来て、悪かったな」

「えっ」

声が重なった。

瞳を大きくした私にベリスは柔らかに微笑んだ。

「急に会いたくなっただ」

うわゝ、と思わず仰け反る。

悪魔とは思えない微笑みの穏やかさに、ついつい見惚れてしまった。

そして、今の一言で、ぐっとベリスとの距離が縮まったように思う。

先程とは口調が変わっているのだ。

まるで敬語を忘れてしまったかのような砕けた口ぶり。

（そっか、幼なじみだっけ）

二人だけの時は親しい態度を取る許しを得ているのかもしれない。

部屋が薄暗くて助かった。

ベリスは私の驚きには気付かず、ナイフで小さく切った野菜をフオークで口元に運んだ。

その綺麗な仕草はいかにも育ちの良さそうな坊ちゃんという感じだ。

「昨日、この城の辺りで星が落ちるのを見た」

「星が落ちた？ 流れ星ってこと？」

そうだとしたら、なんてロマンチックな話だろうと、悪魔を目の前にして拍子抜けした気分になったが、どうやら流れ星は悪魔にとって楽しいものではないようだ。

ベリスは視線を皿に落として言葉を続ける。

「不吉な感じがする。何か変わったことは起きなかったか？」

「変わったこと？」

がりつと、ナイフが皿の上で声を放つ。
冷や汗が流れた。

流れ星で、こんなにも背筋が冷たくなる日が来るとは、思いもよらなかった。

（変わったこと…）

ないことはないが、ここは『ない』と答えておくしかない。

まさか、魔王が死んじゃって、人間を身代わりにしています、なんて言えるわけがない。

「ええつと。心配して来てくれたの？ わざわざ？ 流れ星を見たくらいで？」

「ああ」

「ありがとう」

自然に出た感謝の言葉だった。

人間の友人だって、不安を感じて駆け付けてくれる人なんて多くはない。

悪魔のくせにずいぶん情に厚いみたいだ。

いやいや、そう容易く信じてはいけない。

流れ星っていうのは言い訳で、本当はラウムの推理通り魔王の死を確かめに来たのかもしれない。

もしそうなら、ベリスは相当の悪人かもしれない。
情の厚い振りして、ものすごく酷いことを企んでいるとか。

（いや、でも。悪人というか、悪魔なんだけど…）

私はベリスの顔を盗み見た。

彼は相変わらず俯いたままだったが、臣として当然だ、と言って
心から嬉しそうに笑みを浮かべた。

ドキリとする。

やましいことがある者の笑い方ではない。
無邪気で、可愛い。

見惚れていると、不意に赤い瞳と目が合った。

「本当に、何も無いんだな？」

「うん」

「なら、いい」

カチャリ、とベリスの皿の上で音が響いた。
空になった皿にナイフとフォークを置くと、彼はナプキンで口を

拭
っ
た。
。

7 寝室

「お疲れさまでした」

魔王の自室に戻ると、その扉の前でラウムが私を待っていた。

「どうでしたか？」

部屋に入った私を追い掛けながらラウムが訊いてきた。

私は人差し指を口元に押し当てて、そうだな、と口を開いた。

「思うに、ベリスは白だよ。あの顔は悪いことのできなそうな顔だよ」

素直そうで、いかにもまっすぐ育ったという感じの少年だった。

そう言つと、ラウムはあからさまに表情を歪めた。
今にも舌打ちをしそうな顔だ。

「騙されています！ あなた様はベリス公をご存知ないのです。あの方は嘘を得意とします。聞かされた言葉を鵜呑みにしてはなりません！」

きつく肩を掴まれて、私は顔を顰める。

「でも、嘘をついているようには…」

見えなかったと言おうとしたのだが、肩の痛みに断念させられた。

（痛い！痛いって！！ぜったい爪が食い込んでる！！）

「ベリス公は何かと陛下に馴々しく振る舞い、無礼を働いているのです。陛下を侮っている証拠です！反逆心を抱いているに違いありません！」

「分かった。分かったから！離して。痛い！」

ハッとしたような顔になる。

ラウムは申し訳なさそうに眉を下げた。

「お疲れになりましたでしょう？ 今日はおやすみなさいませ」

確かに疲れていた。

突然いろんなことがあり過ぎたせいだ。

休みたい。

ベッドでゴロゴロしたい。

私は頷いて、ラウムの案内で寝室に移動した。

部屋の中央に天蓋付きのベッド。

当然のことながら、魔王が使っていたものだ。

「私、ここで寝るの?」

「はい」

（ちよっ!!--）

さも当然だというように。

いや、むしろ、『何をいまさら聞いているんだ、すつとこどつこい!』といった感じの返事だ。

（けどさ!　いくら死んじやってるからって、魔王の物を使うなんて、怖いんですけどっ!?!）

頭を左右に何度も振って拒絶してみたが、ラウムは満面の笑みを浮かべて華麗にスルー！。

「それでは、おやすみなさいませ」

静かに扉を閉め、部屋から出て行った。

体を揺すられて重い瞼を開いた。
目の前に見知らぬ少女の顔。

いや、ラウムだ。

悪魔の顔面どアップに驚いて飛び起きた。

「おはようございます。お目覚めはいかがですか？」

「良くはない」

当然だ。

目覚めた場所は魔界で、魔王の城の魔王の寝室なのだから。

（っていうか、もう朝？ さっき眠ったばかりだった気がするんだけど）

つまり、私はまったく寝た心地のしないまま起こされてしまったのだ。

しかし、ラウムは、目覚めが悪いと言っている私をどうにかしてくれるつもりはないらしく、涼しげな顔をして私の前に衣装を広げた。

「はい、今日はこれを着てくださいね。サイズはちょっと大きいかもしれませんが、きつと、たぶん、大丈夫です」

『きつと』と『たぶん』を同時に使うのはどうかと思う。
そんでもって、おそらく全然大丈夫じゃない。

広げられた物を見下ろしてから、私は衣装タンスの前に移動した。
着られそうな服を適当に選んで身に着ける。

「なぜそれなんですかーっ！」

「そんな着ぐるみ着られるかーっ！」

今ここにちゃぶ台があったら、絶対ひっくり返している。

ラウムが着ると言って広げた物は得体の知れない生き物の着ぐるみだった。

頭のとっぺんに付けられたピンク色のリボンがどんなに可愛さを主張していても、デロリと伸びた長い舌や九つもある目玉は気持ち悪さを叫んでいる。

あり得ない。

私が着替えを済ませてしまつとラウムは諦めたようで、ファッションセンスをチェックするように、私の周りをぐるりと一周した。

「この服を着るのでしたら、その黒いマントもちゃんと羽織ってください。でないと、マヌケですわ」

「そついうもんなの？」

マヌケとは思わないが、アドバイス通りに大きな肩パットの付い

たマントを羽織った。

（うわぁ。いかにも魔王っぽい！）

満足を顔満面に浮かべて、ラウムは何度も頷いた。

「お似合いですわ。さあ、オセ様がお待ちなので執務室に参りましよう」

「は？ 執務室？ まさか今日も執務をやれと？」

「はい」

「無理！」

短く拒否してやると、ラウムは目を線のように細めて笑みを浮かべた。

「大丈夫ですよ。昨日も何とかなりましたでしょう？」

「昨日は昨日。今日は今日！」

それに昨日だって十分に危なかったのだ。

オセは魔王にかなり近い人物で、魔王の性格や癖を知り尽くしている様子だった。

ちよつとでも変な言動をしたら、偽物だとバレてしまいそうで、怖い。

絶対に無理だから、と言う私にラウムは大きく頭を左右に振った。そして、カツと瞳を見開いた。

「やって頂きます！」

有無を言わさない気迫があつた。

(こっつ、怖っ!?)

オセにバレるとか、そんなことの前に、ラウムに喰われる！
そんな心地になった。

逆らっても無駄だと知り、私はラウムに手を引かれながら執務室に向かった。

8 / 友情

執務室の前まで来ると、ラウムは重々しくため息を着いた。

今にも額を扉にぶち当てそうな勢いで俯うつむいている。ぼそりと零す。

「せっかく、オセ様をドキリビックリさせようと、先程の着ぐるみを用意しましたのに…」

「はいはい。邪魔だからそこどいて。おはよう、オセ」

ラウムの体を押し退けて扉を開くと、穏やかな顔が振り返った。

「おはようございます、陛下」

その爽やか過ぎる笑顔に、思わず私が硬直した。

(うーん)

確かに、この穏やかな悪魔を『目が点』な状態にさせたいというラウムの気持ちは分かる。

実に悪魔らしくない爽やか悪魔だ。

だが、しかし。

オセを驚かせるためだけに、あの着ぐるみは着られない。
そこまでは頑張れない気がする。

「今日はどんなことをするの？」

「今日はですね…」

ラウムを執務室から追い出すと、オセは何枚かの書類を机に並べた。

「次に行われるサバトについてです。出席予定の悪魔のリストをご確認下さい」

長く細い綺麗な指で示された
書類に視線を落とす。

サバトっていうのが、なんだかよく知らないが、オセの言っており、十数名の悪魔の名前が書いてあった。

「出席を許可できない者の名前がありましたら、おっしゃって下さい」

(…と申されましても)

私は眉を顰めた。

（まずサバトって、何？　そして、名前を見ても誰が誰だか分からないんですけどっ）

誰が誰だか分からない状態で不許可にしたら、後々、面倒なことになりそうで、私は書類に大きく丸を書いてオセに返した。

「皆、許可するということではよろしいのでしょうか？」

「うん。だいたいそんな感じで」

我ながら適当過ぎる！

さすがに不審がられたらどうか、とオセを見やるが、オセは特に気にしている様子はない。

次はこちらです、なんてことを言って、新たな書類を差し出して来た。

そんな感じに執務を始めて一時間ほど経って、私の顔に疲れが見え始めた時、その頃合いを見計らっていたとは思えないタイミングで、扉が叩かれる音が聞こえた。

「失礼いたします」

ラウムだ。

昨日同様メイド姿でワゴンを引いてくる。

どうやら彼女の中では『執務室にお茶を出す時はメイド姿で』という決まりがあるらしい。

差し出されて思わず吞んでしまった紅茶を見下ろして、私は顔を顰めた。

（辛い？）

もしかすると、紅茶だと思っていたこれは紅茶ではないのかもしれない。

カップを受け皿に戻すと、ラウムが、そうですわ、と手を打ち鳴らした。

「カйм様がお見えになりました」

「カйм殿が？」

驚きの声はオセの口から。

なぜそれを先に言わないのかと、ラウムを睨む。

「陛下、わたしが出迎えに参ります」

「うん、頼んだ」

私の答えを聞いたか否かで、慌ただしくオセは執務室を出て行った。

その足音が聞こえなくなってからラウムに振り返る。

「誰が来たって？」

「カйм様ですわ。統領じゅうちやうの地位にある方です」

「統領って、何？」

「統領そうちやうと同じく国家元首の地位を表す名称です。けれど、我が国においては魔王陛下こそが国家元首ですので、統領ではなく統領と名乗り、また、陛下から委任された領地を治めています」

「統領と統領の違いって、王がいるか、いないか？ 魔王のいない国って、あるわけ？」

「統領は王の庇護の下にあるものですが、統領は統領よりも権限が多く独裁が強いので、もはや『王』と名乗らないだけの事実上の王

です。そのため總統の治める領地は『国』と称されます。ちな
みに、悪魔たちの多くでは『總統』という呼び方よりも『大統領』
の方が好まれて使われています」

「大統領？ ああ、それなら分かる気がする」

ポン、と手のひらを打つと、ラウムは肩の力を抜いて表情を和ら
げた。

だが、すぐにカイムのことを思い出して、重々しく言葉を吐く。

「このような時期にいらっしゃる方ではございませんのに」

怪しいですわ、とラウムは拳を口元に押し当てる。

眉を寄せ、考え込む仕草をしている彼女に、執務机に頬杖を着き
ながら尋ねた。

「疑ってるの？」

「はい。だって、おかしいですわ。いつもなら登城される数日
前に手紙を送られる方なんです。今回に限ってそのような手紙はな
く、普段ならいらっしゃるはずのない時期にこうも急に」

それに、とラウムは私の顔にまっすぐ瞳をぶつけてくる。

「カイル様とオセ様はご親友なのです。もしや二人はグルかもしれません」

「二人がかりで魔王を呪い殺したとか？」

「ええ、そうですよ。そうに違いありません。きっとあなた様を見て、事の失敗を悟ったオセ様がカイル様を呼び寄せたのです。間接的に呪いで殺せないのなら、直接手を下そうと思っているに違いなのです！」

息巻きながらラウムの自分の推理を披露していると、足音が戻ってきた。

ノックの後、丁寧に扉が開き、オセが顔を覗かせた。

「カイル殿が陛下との謁見を望んでいます。急ぎのことです」

「急ぎ？ うん、分かった。すぐ行く」

「では、そのようにカイル殿にお伝えして参ります」

再びオセが退出してしまうと、ラウムが痛いほど強く私の腕を掴んできた。

「どうぞ気を付けて下さい。カイル様は極度の人間嫌い。偽物で、しかも人間だとバレてしまったら、確実に命はございません！」

「そんなにヤバイ奴なの？」

ラウムは頷く代わりに、不安一杯の瞳をぶつけてきた。どうやら本当にヤバイらしい。

9 網渡り

甲冑姿の青年が、銀色に輝く兜を取ると床に置き、私の足下に跪いた。

兜の下はプラチナブロンド。

サラサラと、髪が流れたその奥で輝いたものは、碧い瞳。

ようやく日本人離れた顔の悪魔と出会ったと思った私だったが、これは…と、目の前の人物をマジマジと見つめた。

（なんと言うか…。悪魔というよりも天使だ！）

白く透き通る肌。

伏せられた顔はギリシア彫刻みたいで、息をしていることが奇跡みたいに綺麗だ。

「陛下、ご機嫌いかがですか？」

発せられた声も鳥が囀るようで……。

私は己の頬をバチンと打ち鳴らした。

（しっかりしろ！私！！人間だとバレたら殺されるぞっ！）

そうだ。そうなのだ。

自分は今、綱渡りをしている状況だったのだ。

目の前にいる悪魔は、もしかしたら魔王を殺したかもしれない悪魔で、私は今、魔王の振りをしているわけで、殺し損ねたと思われ、命を狙われてもおかしくない立場にあるのだ。

ただでさえ、人間だとバレたら終わりだというのに、完璧に魔王を演じきっても危険だっていう……。

何、この状況!?

思わず、ごくりと咽を鳴らした。

なんだかんだラウムに言いくるめられているような気がしてならない。

そして、気付けば、危険がいっぱいな状況だ。

(うー。無事に生きて人間界に帰れるんだろうか)

ずどおーんと気分が重くなった。

しかし、私の取り柄は、最強のポジティブシンキングだということ

と。

重い気分は長くは続かない。

それにしても、と改めて目の前の悪魔を眺めた。

急ぎだと言うから廊下を駆けてきたのに、カイムの動作は優雅で、とても急用だとは思えない。

（いったい、何をしに来たんだろう？）

首を傾げると、彼はニヤリと笑みを浮かべ、私の手を取った。

「何をしに来たかですか？ そんなの決まっていますよ。暇つぶしに遊びに参りました次第です」

「は？ 暇つぶし？」

「はい。あなたは最高の暇つぶしです」

いけしゃあしゃあと言って、私の手の甲に唇を押し当てた。

「…っ!？」

声はなんとか堪えた。

けれど、心の中では大きく叫ぶ。

(ぎゃあ！ 何すんのこいつ！！！)

これがこの悪魔の普段通りの挨拶だとしたら驚くのも不自然だと思いい、顔では必死に平静さをつくった。

けれど、冷や汗はダラダラだ。

カームは私の手を離し、スッと立ち上がった。

「どうですか。これから人間狩りに出掛けませんか？」

「出掛けません！」

反射的に答えてしまい、しまったと思う。

今度は堪えきれなかった。キスは堪えられたのに！

だけど、仕方がない。

一度飛び出してしまった言葉は二度と口には仕舞えない。

誤魔化すように顔を横に逸らすと、カームは、なぜか追求せずに、

ところで、と話題を変えた。

「昨日オセから聞いたのですが、今年度の殺す人間の数を決められたそうで」

チラリと彼の顔を横目で見やると、彼は不自然な笑みを称えていた。

口元は横に引かれ、一見すると微笑んでいるようなのだが、眼が明らかに笑っていない。

「今年はゼロだとか。人間を殺さないとは、いったいどういうことですか？」

（もしかして怒ってる？）

その声音から何となく相手の感情を読み取って、私は大きく見開いた瞳で彼を見つめた。

暇つぶしというのは嘘で、人間狩りのお誘いも冗談で、本当は私が勝手に決定してしまった『今年一年は人間を一人も殺さない』ということに不満を抱いて魔王城まで乗り込んできたのかもしれない。

そうだとすると、カームは私が本物の魔王だと信じていることになる。

私が決めたことを魔王の決定だと思い、本気で怒っているのだから。

それは同時に、本物の魔王の身に何があつたのかを知らないということになる。

死んだはずの魔王が生きていることに不審を抱いている様子もない。

（カイルも白だ）

直感的にそう思った。

ぶっちゃけ、綺麗すぎる外見に騙されているような気も、自分ながらに、無くもない。

それに、ラウムの言うように、カイルとオセは本当に仲が良いらしい。

昨日決めてオセに伝えたことを、今日既にカイルが知っている。それって、ものすごく早すぎないだろうか。

オセはカイルに対して、そうとう口が軽いつてことだと思う。

それって、政治的に問題あるんじゃないの？

悪魔の政治事情なんて知ったこっちゃないが、オセとカイルの繋

がりに、私は何となく不安を抱いた。

10 嫉妬

カイルとの謁見を終え、私は謁見の間から廊下に出た。

ここまで案内してくれたオセの姿はない。

ラウムもいないので、一人歩く。

（どこに行こうかなあ）

魔王の自室か、執務室しか知らない。

せつかく1人になれたのだ。

『探検魔王城！』というのも良いかもしれない。

ちよっぴり勇者になった気分で、薄暗い廊下を進んだ。

石畳の廊下に、ブーツの踵の音が怖いほど響く。

その音に気付いた悪魔が私の方に視線を向け、深々と頭を下げた。

片手には長く鋭い槍。

暗闇に目を懲らせば、頭の左右にヤギのような角が生えている。

廊下に配置された悪魔はこの悪魔1人ではなく、同様に槍を手にした悪魔が等間隔に配置されている。

それは大抵、部屋の扉の前で、この魔王城はとにかく部屋数が多いことが分かった。

（下手に動いたら迷子になるかも）

迷子なら良いが、更に下手したら遭難しそうだ。

探検なんて無謀なことはやめて、自室に戻った方が良さそうである。

そう思い、自室へと踵を返した時、柱の後ろに人影を見つけ、私は身構えた。

「そこに誰がいる？」

「俺だ」

さつと姿を現せたのはベリスだった。

燃えるような赤毛の少年、ベリス。

魔王の幼馴染みの悪魔だ。

彼は大腿で近付いてくると、親しみを含んだ笑顔を浮かべた。

「会いたかった」

「ええつと…」

ちよっぴりドキマキする。

そんな直球で言われても、言われ慣れていないもんで、どう反応

して良いのか分からない。

故に、私の返事は少しづつきらばうになってしまった。

「何か用？」

「用はないんだけど、会える時に会っておかないと。次にいつ会えるか分からないから」

私の態度が素っ気なさ過ぎたのか、そう言っていると、ベリスは俯いてしまった。

しかし、私はそんなベリスを見やり、首を傾げる。

「ちよくちよく会いに来ればいいのに」

そんなに会いたいのなら、会いに来ればいいのだ。

幼なじみなのだから、と続けて言っ、私は淡く笑みを浮かべる。

ベリスと話していると、ベリスの魔王に対する信頼というか好意が伝わってきて、くすぐったいような心地になる。

私自身が慕われているような気持ちになって、昔、こんな犬を飼ってみたいと思っていたなあと、ほんわかする。

私は軽く爪先で立ち上がると、ベリスの頭を柔らかく叩いた。

「城に来られない事情でもあるの？」

頭を撫でたのが悪かったのか、質問が悪かったのか、ベリスは弾かれたように顔を上げ、私の手を払った。

グツと眼に力を込めて、苦々しく口を開く。

「気に食わない奴がお前の側にベツタリしているから……」

「気に食わない奴？」

私は振り払われた手とベリスの赤く燃える瞳を見比べた。

（オセのことかな？）

魔王の側にいると言えば、側近のオセだ。

執務の時間はもちろんのこと、なんだかんだ言っで、べつたりと付き添ってくる。

ところが、オセのことかと尋ねると、ベリスは分かり易いほどハツキリと顔を顰めた。

「それ、本気で言っているのか？ オセがお前にベツタリしているのは幼い頃からだ。先王陛下がお前に付けた遊び相手、兼、教育係

だからな。そのオセを、俺が今更気に食わないなんて言うわけないだろ」

「そっか…」

そうだったのかと、私は納得しつつ、表面上はヘラヘラと笑いながら誤魔化した。

（オセじゃない？ …とすると、誰？）

ラウムの顔も浮かんだが、カイムの顔も浮かぶ。

手の甲に受けた感触を思い出しながら私は口を開いた。

「じゃあ、カイムでしょう？ ベツタリと言うか、あの人、私の手にキスするから」

「キス？」

ガツン、と鈍い音が響いた。

見やると、ベリスの拳の下でヒビの走っている壁が映った。

（ひいーっ）

俯いた顔。

オーラのように放たれている怒気。

ベリスの拳が退くと、綺麗なほど見事に拳の形に凹^{へこ}んだ壁が見えて、その怒気の強さを私に伝えてきた。

「今、なんて言った？」

「言っていない。うん、何にも！」

「あいつ、キスなんてするのかよっ」

「手に、だよ。手！」

キスはキスでも、どこにされたかは、この際、とっても重要なことのように思えた。

ベリスの顔面に左手を突き出すと、彼はその手を取って舌打ちをした。

「前から気に食わないと思ってたんだ！ シトリにやたら色目使うし、元天使のくせにシトリが男でも構わないとか言うし！」

（シトリって、誰？）

いや、それよりもカイクが元天使だと聞いて納得する。
だから、あの容姿なのだ。

まるで天使みたいだと思ったら、本当に元は天使だったらしい。

（どうして、今は悪魔なんだろう？）

天使から悪魔になったという例は、聖書などを読むとよく出てくる。

そもそも、悪魔の中の悪魔であるルシファーも元々は天使だ。

それにしても、と私はベリスを、慎重に数歩の距離を取りながら眺めた。

一見、育ちの良さそうに見える彼も怒ると見境が無くなるらしい。

あちらこちらの壁に拳を打ち付け、カイクへの暴言を吐き散らしている。

大した二面性の持ち主だ。

ラウムの言うとおり、ベリスも要注意人物かもしれない。

犬っころのような笑顔に騙されてはならない。

もしかしたら、魔王への好意も嘘かもしれない。
嘘を付くのを得意としている悪魔らしいし…。

と、その時。

「シトリ、危ない！」

不意に腕を引かれ、私は体のバランスを崩した。

ドン、とベリスの胸にぶつかり、その直後、先程まで立っていた場所に天井が崩れ落ちるのを目撃した。

ズドーン、と壮絶な音を立ててタイルやら煉瓦やらが落ちてきた。砂埃が舞い、視界が曇った。

ベリスの腕の中でジツと身を潜めていると、やがて辺りに元の静けさが帰ってきた。

「ごめん、俺のせいだ」

頭上で謝罪が聞こえた。

なるほど、ベリスがところ構わず壁を殴り付けてくれたおかげで天井にまでヒビが入り、ついには落ちてきたらしい。

幸い、上の階の床までは落ちていない。

「どうすんの、これ？」

「ごめん」

「でも、怪我なかったし」

すっかりしよげてしまったベリスに私は苦笑して、その背に腕を回して軽く叩いてやる。

まるで子どもをあやすみたいに。

（なんだか、やっぱり憎めない）

犬みたいだ、と再び思う。

一瞬、二面性がどうの疑ったけれど、やはりベリスはそんなに器用なヤツじゃないような気がしてきた。

「あれ？」

突然上がった声に私はビクツと体を震わせた。

疑問符は頭上からで、ベリスは私の両肩に手を置くと、体を引き離れた。

ジッと見つめられる。

「シトリって、柔らかい体をしているんだな。 こう、ギュツとすると、気持ちいい」

そんなことを口にしてベリスは私を抱き締める。
そして再び、あれ？ と首を傾げると、私の体の上に大きな手を
這わせる。

ムニユ。

（何！？）

条件反射というヤツだ。
気が付くと、私は悪魔を殴り飛ばしていた。

見事に吹っ飛び、床に沈んだベリスを、私は己の胸を左手で隠し
ながら見下ろした。

ベリスは、自分が殴られたという状況が掴めないらしく、啞然と
私を見上げている。

かっとな私の顔に朱が走った。

（なんて奴！ 私の胸、揉みやがった！）

もう一回くらい殴ってやろうかと思った時、ベリスのまぬけ顔が
動いた。

口を大きく開いて、言ったのだ。

「女？」

「…っ！」

「小さい頃は、確かに男だったよな？　一緒に水遊びして裸見てるし。なんで女になっているんだ？」

かくん、と勢い良く首を傾げる。
だいぶ混乱している様子だ。

（うわっ。ヤバイ！）

なんとというか、油断した！

今は良い感じに勘違いしてくれているが、『男ではない』から『魔王ではない』に結びついてしまったら大変だ。
偽物だってバレてしまう！

焦った私はどう誤魔化せば良いのか分からず、とりあえず、ちがーうっ、と叫んで再度ベリスを殴り飛ばし、踵を返した。

11 夜這い

自室に戻ると、昨日同様、その扉の前にラウムが待っていた。彼女は全力疾走で戻ってきた私に、あらあら、と言って己の頬に手を当てた。

「どうされたんですか？」
「どうって…」

肩で息をしながら、どこからどう説明したものかと頭をフル回転させる。

だけど、結局、何も浮かばなくて、先程疑問に感じたことを口にしてみた。

「シトリって、誰？」
「え？」

ラウムはきよんとする。
それほど思いがけない質問をしてしまっただろうか。
私はただ先程ベリスが口にした名前を尋ねただけなのだが…。

それからすぐにラウムはハツとした様子を見せ、まるでそんな動揺など無かったかのようにハッキリと答えた。

「それは陛下の御名です」

「魔王の名前？」

「わたくしつたら、お教えするのを忘れていました！」

（はあ〜？）

「だって、わたくし、陛下のことは『陛下』もしくは『我が君』としか呼んでいませんもの。うっかり陛下にも御名があることを忘れていました」

（なんだ、それ！！！！）

私はガツクリと肩を落とした。

なぜ忘れるのが理解できない。

いいんや、百歩譲って忘れられるとしても、名前があること自体を忘れるって、どうなの？

基本的に名前って、誰にでもあるもんなんじゃないの？

名前がなきゃ呼べないし！

それとも、なにか？

悪魔には名前がない悪魔がいるとか？

いや、でも、今、話しているのは魔王の名前についてだし。

さすがに名前のない魔王はいないだろう。

とりあえず私はラウムに向かって、信じられない、と肩を竦めると、就寝の支度に取りかかったのだ。

さて、その夜のことだ。

私は気配で目覚めた。

パチリと瞼を開くと、驚きに見開かれた瞳と目が合う。
思わず叫んだ。

「ぎゃああーっ」

「うわぁーっ」

つられたのか、それとも本気で叫んだのか、相手も口を大きく開き、すぐに私と己の口を手で覆った。

「うぐっ」

辺りは暗闇である。

何者かが体に跨り、上から私を見下ろしている。

私は口を塞がれたまま、いったい自分の身に何が起こっているのか把握しようと視線を巡らせた。

次第に眼が闇に慣れ、その人物が赤毛の持ち主だと分かった。

（ベリス？）

私に騒ぐ様子がないと知り、彼は手を離れた。

「何するの！」

「だって……」

やはりベリスだ。

呆れたような、怒りで力を使い果たしたような、脱力感に見舞われた。

近すぎるベリスの顔面に頭突きをかまし、自分の体の上からどかした。

「いてっ」

「あんだ、こんなところで何やってるの！」

「何って、昼間のことをもう一度確かめようと思って」

「昼間のこと？」

性別のことだ。

本物の魔王は男だが、偽物の私は女。

ベリスは私を本物だと思っているから、昼間、私の胸を触ってビ
ツクリしたのだ。

私はため息を漏らした。

そして、ふと己の胸元を見やる。

何やらスースーすると思っていたら、夜着の前が全開で、胸が露
わになっている。

「何これ！」

「だから、確かめようと思って…」

「おまえかーっ！」

ガッン。

拳骨^{げんこつ}でベリスの頭を殴り付ける。

この暗闇で胸が見えたとは思えないが、おそらく直に触れたに違いない。

（なんて奴！）

「シトリ、やっぱり胸が膨らんでる！」

「違う！ これは筋肉だ！」

女としてそれはどうよ？ と思うが、ここは命がけで全否定しておきたい。

だって、命が掛かっている！

私は絶対に生きて人間界に戻るのだから、こんなところで、こんな風に、胸があるとなんとかが原因で偽物だとバレて死にたくはない！

しかも、こんな微々たる胸で！

（どうせ私は一見すると無いように見えるAカップですよっ！！！！）

もっ…女よりも命だと思った。

心で泣きながら、胸を筋肉だと言い張る。

「ほら、筋肉ムチムチになると、胸が膨らむじゃん？ それだよ、それ！」

「筋肉？ けど、柔らかかったぞ？」

（わーっ。やっぱり触ってる！？）

このエロ悪魔、と罵りたい気持ちを抑えて、私は夜着の前を閉ざした。

「誰がなんて言おうと、これは筋肉だ！ つべこべ言うな！ とつとと出て行けっ！」

枕を顔面めがけて投げつけた。
ぼすつと良い音がなると、たつぷりと綿の入った枕は痛くないだろつに、まるでそれがお約束であるかのように、ベリスは痛いと声を上げた。

「おかしいなあ、絶対に……」

「まだ言っかつ」

「分かったよ。もう言わない」

「よし！ 出て行け！」

びしっ、と扉の方に指差してやれば、渋々といった様子で、ベリスは寝室を出て行った。

暗闇に1人になると、どっと疲れてしまい、ふかふかベッドに背中から倒れ込んだ。

（この部屋、鍵掛かってないわけ…？）

魔王の部屋なのに、なんでこんなにも不用心なのだろうか。

扉に鍵が掛かっていないってことは、夜中、眠っている時に誰でも出入りできてしまうってことだ。

（寝込み襲われたら、殺されちゃうかもね…）

そして、ベリス。

彼は魔王の部屋に無断で出入りすることに躊躇が無かった。

幼馴染みだから、という許容範囲は軽く超えている。

（やっぱり、ベリスが怪しい…のかな…？）

怪しいと思い始めたら、さらに疑わしくなる。

そもそも、本当に、胸の有無を確かめるだけにやって来たのだろうか。

胸元を開いていたではなく、首元を広げて、頭を切り落とすやすくしていたのでは…？

だって！

本当に、本当に、ただ胸を確かめに来ただけだったら、ものすごく変態悪魔だ。

そんな変態…、あり得るのだろうか。

12 継承争い

朝。

あんなことがあった翌日なので、当然のことながら、目覚めは悪い。

おはようございます、と明るく挨拶してきたラウムに、今日は無理、と答えた。

ラウムが心配そうに顔を覗き込んできた。

「どうかなさったのですか？」

「どつって……」

夜中、目覚めたらベリスに胸を触られていたのだ。

そう答えようとして思い止まる。

ベリスはカймから手の甲にキスされたことを告げただけで激怒した。

悪魔にとって何が逆鱗か予測が付かない。

私は思い悩んだ末、当たり障りのない質問をすることにした。

「魔王って、ベリスと仲良かったの？」

「まあまあですわね」

「オセとは？」

「まあまあですわ」

「カイクとは？」

「まあまあです…」

答える気があるんだろうか、と私が若干あきれ顔になった時、ラウムの表情が歪んだ。

苦しそくに眉を寄せて、私の両腕をきつく掴む。

「なぜですかっ」

「え。何が？」

「なぜ、他の者の名前ばかりを口にされるのですか？ 今、あなた様と共にいるのはわたくしなのに！」

ぐっと咽を鳴らし、ラウムは俯いた。

その肩が小刻みに震えている。

逆鱗に触れないようにと質問を選んだのだが、選び違えたらしい。

だけど、いったい何が彼女の気に障ったのだろうか。

怒らせるようなことを言った覚えがないのに。

困惑する私に、ラウムは目を伏したまま声を荒げた。

「わたくしにどうしろとおっしゃるのですか？ その瞳をえぐれば良いのですか？ 咽を切り裂けば良いのですか？ 他の何者よりもわたくしの方が陛下を愛していますのに！」

「ラウム？」

まさに手が付けられない状態。

名前を呼ぶことしかできなくて、私が名前を呼ぶと、ラウムはハッと顔を上げた。

目が合う。

なんて表情をしているのだろう。

悲しそうで、悔しそうで……。

だが、それは一瞬。

すぐにラウムは、ふわりと微笑んだ。

「わたくし、何か言いましたでしょうか？」

「は？」

「お茶をお入れしますね」

言って、ラウムは私に背を向け、ティーポットに手を伸ばした。
カップに紅茶を注ぐ。

振り返り、それを差し出した時の彼女はすでにいつも通りのラウムで、先程のあれは何だったのだろうかと首を傾げざるを得ない。

（何事?!）

さっぱり訳が分からない私を他所に、ラウムは爽やか笑顔で言った。

「今日の執務はお休みです。なんでもオセ様にご用ができたとか」

「へえ、ないんだ」

カップを受け取りながら、それは良かったと答える。

確かにそれはホツとするような話だ。

魔王の執務は人間には些か決めかねる。

魔界事情にも詳しくないことだし、自分の決定に不安が残るのだ。

（執務がないのは嬉しいことなんだけど…。それにしても辛いんだよね、この紅茶）

下品承知で、私は一度口に入れた液体をだぁーっとカップの中に戻す。

入れてくれたラウムには悪い気がしたので、ラウムに見られないように気を付けながら…。

そして、顔を顰めながら、カップを机のできる限り遠くの方に置いた。

「オセの用事って、何？」

「詳しいことは聞かされていません。何やらアヤシイですわね」

例の如く怪しんでラウムは、ところで、と続けた。

「午後になりますと、シャックス侯がお見えになられるそうです」

「誰？」

「ベリス公同様、陛下の幼なじみで、侯爵位にあられる方です」

「へえ」

「どうぞお気を付け下さい。シャックス侯は他人の心に敏感です。特に人間の心は手に取るように知ることができるらしいですわ」

「心を読まれてしまうつてこと？」

それはマズイ。

偽物だと一発でバレてしまつてはいいか。

「貝のように心を閉ざす。それができなければ、何も考えないことです」

「難しいなあ」

「では、午前中はその練習をしましょう。心を無にするのです」

どこぞの格闘漫画の修行シーンみたいなセリフだ。

けれど、何も考えないっていうのは漫画のように容易なことではなくて、私はすぐに両手を挙げた。

「無理」

「困りましたね。それでは、なるべくシャックス侯には近付かない
てくださいね」

「うん。そうするよ」

それにしても、次から次にと悪魔がやって来る。

魔王城なのだから当然なのかもしれないけれど、その度に疑わなければならぬ人物が増えていく。

「ねえ。魔王を殺した動機って何だと思う？」

この人を見てはアヤシイ、あの人を見てはアヤシイ、と言っていったらキリがない。

それよりも動機を考え、その動機を抱きそうな人物を上げていった方が早いのではないだろうか。

そう言つと、ラウムは手を打ち鳴らした。

「まあ、さすが陛下のそっくりさんですね。陛下同様、賢くていらつしやる！」

喜んで良いものか、微妙な誉め言葉だが素直に受け取って私は人

差し指を立てた。

「じゃあ、さっそくだけど、なんで魔王シトリは殺されたと思う？」

「ズバリ継承争いですわ」

ラウムの瞳がキラリと輝く。

「先王陛下には王子が、陛下を含めて三人いらっしゃいます。しかし、お二人に先王陛下との血の繋がりはなく、なので、世継ぎは当然、我が君。けれど、お二人は納得して下さらなかったのです」

「ん？ ちょっと待って。血の繋がらない親子って？」

「親子の契約を交わされた父と息子です」

「つまり、養子ってこと？ それなら確かに、先王の実子であるシトリが王位継ぐのが妥当だよな」

「はい。しかし、お二人の方が、お年が上。年長であることを理由に継承権を主張されているのです」

「それじゃあ、その二人にはシトリを殺す動機があるってわけだ」

「ええ。そして、わたくしが思いますに、お二人のどちらかが関わっているに違いありませんわ。けれど、お二人が自ら手を下したとは考えられません。黒幕はそうであるにしろ、狡猾な方々です

から、我が君の身近な者を己の側に引き込み、指示したに違いないのです」

「だから、ラウムはシトリの回りにいる悪魔ばかりを疑っていたのか」

ところで、と私はラウムに向き直った。

はい、と答えてラウムは水差しを持ってくると、水を注いだグラスを私に手渡した。

水は凍り付く直前のように冷たく、少し辛い。
舌の先がピリピリする。

「その二人の王子たちの名前は？」

「ストラス様とウアサゴ様です」

「そのどちらかが黒幕だって分かっているのなら、そいつらを調べれば？」

「そんな命知らずなことできません！」

青ざめてラウムが言うには、王子の立場にある者を不用意に疑い、もしもそれが過ちであつたら命を奪われても文句は言えないのだとそうだ。

今更だが、ラウムが誰彼構わず疑いの眼を向けている必死さが分かった気がする。

疑って疑って疑い尽くすしか犯人を突き止める術がなかったのだ。

13 暴露

午後になり、噂の悪魔 シャツクスが魔王城にやって来た。

彼の特技は盗みで、人の心の内にある言葉まで盗むのだという。

一瞬にして偽物だとバレる可能性が大きい。

なるべく近付きたくない相手だが、登城の挨拶だけは受けなくてはならないらしい。

仕方なく、私は謁見の間に向かった。

ラウムの案内で謁見の間に行くと、その廊下にラウムを残して、私一人で入室する。

赤い絨毯が敷き詰められた大部屋に入室すると、その悪魔は頭を垂れて跪いた。

ジャラジャラと金属音が響いて、私はシャツクスの容姿をまじまじと見回した。

悪魔らしくない格好だ。

とは言え、『らしくない』と言い切れるほど悪魔を見知っているわけではないが。

レザージャケットに、レザーパンツ。

ヒールの高いブーツを履いて、腰には鎖が巻き付けられている。

先程のジャラジャラはこの鎖だ。

（なんか、見るからに怪しいんだけど…）

ラウムの口癖が移ったわけではないが、怪しいと思わざるを得ない。

魔王の玉座に腰を降ろしてから、私が許可を出すと、シャックスはゆっくりと顔を上げた。

灰色の髪影から現れた橙色の瞳。

（うわっ。目つき悪っ！）

心の中で声を上げてから、しまったと思い見やると、シャックスは物言いたげに私を見上げていた。

おそらく今の思いは読まれてしまったに違いない。

何とか誤魔化そうと、よく来たね、と言って、ヘラヘラ笑って見た。

しーん。

シャックスはクスリとも笑わないし、恐ろしいほど無口だ。

（もう部屋に戻ってもいいかなあ。場が持たないし）

ピクリとシャックスの細眉が動いた。

「戻られれば良い」

「え？」

「我は構わない」

（読まれた！）

私は口元を引きつらせた。

ジロリと、シャックスを睨む。

ところが、仮にも、魔王に睨まれているというのに、シャックスは怯んだ様子がない。

魔王とこの悪魔は、幼馴染みだと聞いたが、これも幼馴染みならではなのだろうか。

魔王をまったく恐れていない。

もつとも、この魔城にやって来る悪魔たちは、誰一人として魔王を畏れてはいないが。

（魔王シトリの権威っていったい…っ！）

一応、言っておくが、衛兵たちや侍女たちはちゃんと魔王に対して敬った態度を示してくれている。

態度がでかいのは、ベリスやカイクだ。
そして、オセは魔王に対して容赦がない。

しかし、オセの場合は、教育係なのだから仕方がないのかもしれないけれど。

ところで、と、赤い絨毯に膝を着いているシャックスを眺めながら思った。

（何しに来たんだろう？）

「星が落ちた故…」

「はあ？」

「不吉だと思い、参上した」

ああ、と手を打つ。

またまた考えを読まれたのだ。

こいつ、また勝手に読みやがって、と思ったが、すぐに諦め気分になって、そのまま彼との会話を続けた。

「ベリスも言ってた。星が落ちたって」

「実際に落ちた故」

愛想の欠片もなく、シャックスの言葉は簡潔で素っ気ない。

（ベリスは流れ星を見て、即、駆け付けて来てくれたんだよねえ。それに比べてこいつってば、ベリスより二日も遅いし）

ピクリとシャックスの目元が引きつった。

悪い目つきが更に悪くなる。

「我はベリス公のように直情型ではない。調べるべきことを調べから来た」

「調べるべきこと？」

「星が落ちる原因は二つある。一つは偉大なる存在が死した時。もう一つは何者かが強大な魔力を使用した時。我はそのどちらである

かを調べてからここに来た」

「……そ、それで？」

サツと冷たいものが背筋を駆け抜けていった。

橙色の瞳はどこまでも見通しているようで、逃げ出したくなる。

シャックスはしばらく瞼を閉ざし考え込むような仕草をしてから、カツと目を見開いた。

「あの星の落ち方は、何者かが強大な魔力を使用した時の落ち方だ！」

何者か。

おそらくそれはラウムで、彼女が私を魔界に召喚した時に星は落ちたのだ。

だけど、私はここで肩透かしを喰らった気分になる。

てつきりもう一方の原因を口にされると思っていたからだ。

（あれ？　もしかして偉大な存在じゃないとか？）

シトリは魔王に成り立てで、まだ偉大ではないということなのだろうか。

だから、死んでも星は落ちなかった？

（とにかく、シトリが死んだことがバレたわけじゃないから、良かった…）

「何？」

「うわっ」

慌てて私は己の口を両手で塞ぐ。
だけど、本当に塞ぎたいのは口ではなく心だ。

「今、なんと？」

「何にも言ってません！」

「陛下が亡くなったと聞こえたが……」

「亡くなってますん！」

私、陛下！私！！！！

…と、自分を指差して、口をパクパクさせる。

しかし、シャックスは瞳を細め、すくつと立ち上がると、一歩、また一歩とゆっくりと歩み寄ってきた。

その目は据わっていて、かなり怖い。

「いったいどういうことだ？ 目の前にいる陛下は陛下ではないのか？」

ガシツと両肩を掴まれて顔を近付けられる。
橙色に自分の顔が映って、私は息を詰めた。

（もう無理！ 考えを読まれちゃう相手にどう誤魔化せって言っただ！）

こんなヤツに合わせたラウムを恨みたくなった。
どう足掻いたって、バレないわけがないし、どうしてもバレてはならないのならば、ラウムは私に彼を合わせるべきじゃない！

（あーっ。無理！！！）

私はシャックスの手を振り払い、彼の胸をドンツと押すと、二人の間に距離を作った。

「そっだよ！ 私は偽物なんだ！ ちなみに人間だ！ どうだ驚いたかーっ！」

荒げるように大声を出して言えば、シャックスは眉を上げ、目を大きくした。

しばらく固まり、押し黙った末で、ポツリと零した。

「……驚いた」

「……」

何だろっ、この悪魔。
まったく掴めない。

しかも、バレたからと言って、すぐに飛び掛かってくる様子はないようだ。

ホッと力が抜けて、ガツクリと肩を落とした。

「しかし、何故、人間が魔界に？」

もっともな疑問に私は腰に両手を添える。

「ラウムに召喚されたんだ。なんでも魔王シトリが死んだとかで」

「何？」

シャックスの表情が険しくなる。
とは言え、微妙な変化なので定かではない。
私は構わず言葉を続けた。

「ラウムは、シトリの死が他の王子たちに知られると争いになるから、それを隠そうとして、シトリそっくりな私を召喚したみたい」

「…確かに、あなたは我が魔王陛下そっくりだ」

「らしいね」

オセやカームは疑いもしないし、ベリスは私の胸を触って逆に魔王女性化説を押し立てちゃうくらいだ。

私の顔は、そうとうシトリに似ているに違いない。

だけど…。

「もう限界なんだよね。魔王の振りをし続けているのも」

どうにかしてくれないだろうか、と言うと、シャックスは瞼を閉ざした。

「確かに、本当に我が魔王が亡くなったとしたら、その死を隠すのは最善の手。しかし、あの方は真実亡くなられたのだろうか？」

「え？ どういうこと？」

「あなたは陛下の亡骸を見られたのか？ 確かに死んでいると」

そういえば、と思って頭を巡らせてから、私は首を左右振った。

「うっん、見てない」

自分が把握している現状はすべてラウムから聞かされた情報に限られている。

彼女が、魔王は死んだのだ、と言っので私はそれを信じたのだ。

「これは何か裏がありそうだ」

どうやらシャックスはラウムに疑いを持ったらしい。
私に鋭い瞳をぶつけてきた。

「協力して下さい。真実を明らかにするために」

「協力？」

「このままラウム伯の言う通りに振る舞い続けてください。我はその間にラウム伯の真意を測る！」

「ええっ！？」

なんだろう、この展開！

そう驚いた時には既にガツチリと腕を掴まれ、体勢的にも心理的にも逃れようがない。

断ったら殺す、というような目付きで睨まれて、私は渋々頷いた。

14 奇病？

シャックスとの謁見を終え、夕食も終えたあと、自室でのんびり過ごしていると、不意に扉をノックされた。

オセカラウムだろうと思い、軽く返事をする、扉は遠慮がちにゆっくりと開いた。

「シトリ？」

驚いて振り返ると、ベリスがそこに立っていた。

「な、何？」

「顔が見たくなって…」

「……」

微妙な沈黙が降りてくる。

魔王とベリスの距離関係が分からない今、ここで下手なことを言ったらバレそうで怖い。

だけど、ベリスと二人きりで沈黙はもつと怖い。

ベリスは予想外な言動をするくせに、何気に鋭いから困るのだ。

私は会話を探そうと視線を漂わせた。

「なあ」

先に口を開いたのはベリスの方だった。

ベリスよりもさきに話題を見つけられなかったことに、私はなんだか負けたような気分になる。

（というか、こいつ、いったい何を話す気だ！）

なんとなくだが、先に口を開いた方が会話の主導権を握れるような気がする。

ということは、この場の主導権はベリスに握られてしまったことになる。

私はドキドキしながらベリスの次の言葉を待った。

「お前さあ、奇病にかかっているんだろ？」

「はあ〜?」

案の定、ベリスの言動は突拍子もなく、意味不明だ。

目が点になる。

何を言われたのか本気で分からなくて、力一杯に聞き返した。

（奇病って、何！？　つか、誰が？？？）

私が怪訝な顔をすれば、ベリスは焦ったように頭の後ろを掻いた。

「昔、シャックスから聞いたことがあるんだ。男が女になっていく病気があるって」

（へえ。魔界にはそんな病気があるのか…）

って！

感心している場合じゃない。

ガシッと腕を掴まれて私は冷や汗を流した。

ベリスの手は骨張っていて、固い。

大きな手で、まるで小枝を掴むように拘束されながら、私は言葉を失っていた。

「調べさせてくれ」

「…な、何を？」

「下の方がどうなっているのか」

「はあ？」

「だって、お前が心配なんだよ。あんなに胸が膨らんでいて、下も無くなっていたら……。うわぁーっ！」

突然絶叫するベリス。

いったい何を想像したんだろう。

いや、違うな。

いったい何を妄想したんだろう！

ムカついたので、とりあえず殴ってみた。

「いてっ。ひでえよ、シトリ。俺は真剣に……」

「皆まで言わんでいい。真剣に妄想したんでしょ！」

「心配したんだ！」

「そう。それはどうもありがとう。でも、いらないから！」

素っ気なく言ってやって、そっぽを向いた。

（いったいなんなんだ、この悪魔はっ！！！）

その時、憤慨していた私の視線が、ふっと陰った。

目線を上に移動させると、ベリスの唇が間近に迫っていた。

「ちよつと！！！」

「お前が女になったのなら、俺だってお前が好きだ。この想い、他の誰にも負けない！」

「なんだ、それーっ！」

いったいこれはどういう展開なんだろう。

てつきり魔王とベリスの間には男同士の友情が築かれているのか
思っていた。

それなのに、いきなり押し倒されてるし！

片腕は封じられているので、もう片方で、ぐいぐい迫ってくる顔を
防いだ。

だけど、ベリスの力は信じられないほど強い。

何と言つか、さすが悪魔だ。

なんて、誉めている場合じゃないんだけど。

「男でも女でも構わないなんて言うカイムのやろうのことは、正直、気持ち悪いと思っている。だけど、ここ数十年、俺は考えていたんだ」

人様の体の上で、切なげに眉を寄せ語り始めたベリス。
なんの話だ、いったい！

「俺の方が昔からシトリの傍にいて、シトリのことを想って来たのに…。他のヤツにシトリがとられるんじゃないかって、俺、気がしじゃなくて…。だから、大丈夫か大丈夫じゃないかって考えたんだ」

さも重大な発表をするかのように、ベリスは間を溜めて、真剣な顔で宣った。

「俺、シトリ相手なら大丈夫な気がしてきていたんだ」

「何が!？」

ベリスさん、ベリスさん。

私はまったく大丈夫な気がしてこないんですけどっ！

はやく離れて欲しいとの切なる願いは、ベリスに少しも届くことなく、彼はさらに続けた。

「俺、シトリが男でもいいやって思ってきたんだけど、でも、シトリが女なら、ぜんぜん問題ないじゃん？」

「何が！……！」

「シトリ、愛してる。俺を受け入れてくれ！」

「嫌だあーっ！……！」

（無理！ もう絶対無理！）

これ以上魔王シトリのふりなんて続けられない。

これ以上、続けていたら、命の危機より先に貞操の危機だ。

シャックスにバレてしまったこともあって、もう一人、ベリスくらいに知られてもいいや、という気分になってきた。

近付いてきた顔を拳で思いっきり殴り、怯んだベリスを力一杯に睨み付けた。

これでもか、というくらいに拒絶の意を込めれば、さすがにベリスは気が付いたらしく、私の体の上から退いた。

「なんでだよっ！」

「だって、私、シトリじゃないし！」

「は？」

「別人です！」

すぐには信じられないらしく、ぱちくりとベリスは瞬いた。

「なに言っているんだよ。別人だなんて」

「別人です！」

「こんなにシトリにそっくりなヤツがいるわけがない」

「それでも別人です！　ちなみに人間です」

「人間？　人間がなんでここに？」

良い質問だ。

私もそれを聞きたい。

やや逆ギレ気味に、私はベリスに答えた。

「ラウムに召喚されたの！　この通り、顔が魔王に似ているから！」

「あの女！」

ガツンッ、と突然ベリスは拳を壁に叩き付けた。
どうやら信じてくれたらしい。

話が分かる悪魔で良かった。

いや、話が分かるっていうか、頭の構造が単純な悪魔なのかもしれないが。

「シトリそっくりな人間を魔界に召喚するなんて、何か企んでやるな。前々から何かやらかしそうで、気に食わなかったんだ！」

吐き捨てられたベリスの言葉に私は、あれ、と思う。

（気に食わなかった？）

「もしかして、ベリスが気に食わなかった相手ってラウムだったの？ ラウムが魔王の側にベツタリしているから城に来たくなかったの？」

こくん、とベリスは頭を縦に動かした。
素直だ。

こう素直な態度に出られると、先程、襲われそうになっていたこともすっかり忘れそうになってしまう。

（犬っぽい…）

ついつい許したくなってしまうから、不思議だ。

それで、とベリスは眉を顰めた。

「…シトリは？ 本物のシトリはどこにいるんだ？」

「魔王は死んだって、ラウムが言っていた」

「馬鹿なっ！」

顔色を変えたベリスに、私は慌てて付け加える。

「でも、シャックスは死んでないかもって」

「シャックスがそう言ったのか？ 本当に？」

頷くと、ベリスはホッと息を吐いた。

「それならシトリは無事だ。きっとどこかに閉じ込められているんだ。すぐに助けに行ってやらないと…」

なぜシャックスの言葉をそのまま信じるのだろうか？
少し疑問が湧く。

（幼馴染みだから？）

魔王とベリスが幼馴染みで、魔王とシャックスも幼馴染みであれば、ベリスとシャックスもおそらく幼い頃からの知り合いだろう。

もしくは、彼らも幼馴染みだったかもしれない。

ともあれ、ベリスはシャックスに絶大の信頼を寄せているらしい。

生きているかもしれない本物の魔王を捜すと言って、ふらふらとベリスは歩き出す。

何処へというわけではない様子だ。

あてもなく捜そうというらしい。

その後ろ姿がまるで主人を探す忠犬のように見えて、私は彼が部屋を出てからも、その背が廊下の先をずっと進み、見えなくなるまで見送った。

15 唯一の毒

翌日、オセとの執務を終えた私はシャックスを訪ねた。

シャックスに使っている客室は、魔王の部屋と同じくらいの広さがあるが、あちらこちらに得体の知れないガラクタが散乱しているものすごく狭く感じられる。

その中でも、部屋のだ真ん中を陣取っている大きな釜が、謎だ。

人間がそのまんま煮込めそうで不気味である。

シャックスは私の姿を認めると、わざとらしいほど丁寧にお辞儀をした。

「わざわざのお越し、ありがとうございます。陛下もどきさん」

「陛下もどき……って」

間違っではないけれど。

（なんか、ムカツク）

シャックスに勧められた椅子に腰掛けながら、私は、それで、と

彼を見上げる。

「私の方からは特に情報はないんだけど、そっちは何かある？」

「ラウム伯の部屋から、サマエル草が見つかった」

「サマエル草？ 何それ？」

「サマエル様の城に生えている毒草だ」

（サマエルって、誰かの名前だったのか）

まずはそこから驚いた。

なんと言つか私の魔界知識は、ゼロなのだから仕方がない。

1から説明してくださいと、シャックスに視線を送った。

彼は私と向き合うように腰を降ろすと、鋭い眼をさらに細めて、生まれ持った人相の悪い顔をさらに怖ろしくする。

「その名は『神の悪意』もしくは『神の毒』という意を持つ。…サマエル様は墮天使だ」

「ふーん」

墮天使ってことは、カイムのように、元は天使だったんだけど、

悪魔になったってことだな。

それにしても、悪意とか毒とか、すごい名前である。

それから彼はガラクタの中からティーポットを探し出すと、同様に探し出したカップに紅茶を注いだ。

絶対に冷めていると思ったそれは意外にも湯気が出ていて驚いたが、更に驚いたことに、ガラクタから巨大ゼリーが発掘された。

両手に乗るくらいに大きな緑色のゼリーを、シャックスはナイフで薄く切ると、皿に乗せ、私に差し出す。

食べる、ということらしい。

けど…。

私は無言でゼリーを見下ろした。

（食べたくない。衛生的にどうよ、これ）

ピクンツと、シャックスの眉が上がった。

（また心を読んだな…）

仕方がないので、私はシャックスからスプーンを受け取って、一口含んでみた。

（あれ？ 何というか、まずくない）

緑色に反してオレンジ味なのだが、そうだと思って食べてみれば、結構おいしい。

意外過ぎて、瞳を大きくする。

とはいえ、衛生的にはどうかやっぱり分からないが。

もつとも悪魔相手に衛生面を期待してはいけないのかもしれない。

次に、紅茶に手を伸ばした。

ラウムが入れてくれる紅茶の辛さを思い出しながら一口含む。

ところが、こちらも美味しい。

まったく辛くない。

むしろ甘い。

ホッと息を吐くと、シャックスの表情が微妙に緩んだ。

彼は紫色の草を私に差し出す。

「それがサマエル草だ。サマエル草の毒は、我らに効く唯一の毒。それによって命を落とすことはないが、用いる量によっては魔力を封じられたり、記憶を操作されたりする」

「記憶を操作するって？」

「ある特定の記憶を失わせたり、偽物の記憶を植え付けたり……だ」

「へえ。魔界にはそんなことができる草があるのかあ」

感心してシャックスを振り返る。

そして、それにしても、と私は首を傾げた。

「なんで、そんなもんがラウムの部屋にあつたの？」

シャックスの口調から、そのサマエル草とやは、誰でも所有している物ではないみたいだ。

そりゃあ、そうかもしれない。

毒草なのだから。

「ラウムはサマエル草を何に使うつもりなのかな？」

「或いは、何に使ったのか…」

「え？」

私の言葉を過去形に言い直して、シャックスは考え込むように無言になってしまった。

充電が切れた携帯電話のように、うんともすんとも言わないシャックスに諦めを付けて、私は彼の部屋から出た。

そして、すぐに私を待つ人影に気が付いた。

ずっとそこでそうしていたのだろうか。

壁に背を預け、腕を組み、瞼を閉ざしている。

私が彼の名を呼ぶまでそうしているつもりなのではないかと思わせた。

一つ、呼吸をしてから、私はその名前を呼んだ。

「カイクム？」

声を掛けると、碧い瞳がすっと開かれる。

「陛下」

その瞳の輝きを見て、私は直感的に、ここは逃げた方がいいと悟った。

初対面の時もそうだったけれど、この悪魔に関わるとろくなことがない気がする。

（キスされたし！）

それは手だったけれど、そのせいでベリスにまで襲われるハメに

なつたのだ。

厄災がこの悪魔のせいと言っても過言ではない気がする。

なので私は、じゃあ、と言ってさり気なく去ろうとした。

だが、あえなく、私の腕はカイクに掴まれた。

（ぎゃあーっ！）

こうなつては逃げられない。

腹を括って、私はカイクに振り返った。

「えーっと、何？」

顔を引きつらせながら尋ねてやると、カイクは私の腕をぐいっと自身の方へと引き寄せた。

とんつ、と私の肩がカイクの胸に当たった。

「雰囲気が変わられた」

「えっ」

ドキリと胸が鳴る。

けして、元天使だけある綺麗な顔が近いからではない。

偽物だとバレたのかと思ったのだ。

冷や汗が流れた。

「ど、どこが？ どこも変わってないよ」

聞き返すと、カイムは口元を緩めて首を傾げる。

「どこと尋ねられましても答えることはできませんが、どことなく変わられたように思っています」

「それは、きっと気のせいだよ！」

私は言い切った。

（どこだかハッキリ答えられないようなものは気のせいにするのが一番！）

うんうん、頷いて、私はカイムを納得させようと試みた。

ところが次の瞬間、くつくつと、笑い声が響いた。

きょんとんとして見上げると、カイルが耐えられないとばかりに笑っている。

「もう少しマシな答えようはないのか？」

彼は背後に向かって片手を振り上げた。

「オセ、お前の思った通り、こいつは陛下ではない。魔力も感じないしな」

そうですか、と静かな声が響き、柱の影からオセが姿を現す。瑠璃色の瞳で私を見つめ、何やら納得したように頷いた。

（いったい何事！？）

状況が呑み込めない私に、オセは穏やかに微笑んだ。

「カイル殿が言われるのでしたら、間違いありませんね」

（あれ？　もしかしてバレてる？）

あっさり過ぎて危機感がない。
呆気にとられながら悪魔二人を見上げる。

「えーっと、いつから？」

「三日前でしょうか…」

オセは胸元から紙切れを取り出した。

「捕らえたラウム伯の使い魔が持っていたものです。先王陛下宛の書状のようですね。内容は……陛下がお亡くなりになったと、驚くべきことが書かれています」

（しよじょーう？）

そういえば、そういう手紙を誰ぞに送るとかなんちゃらラウムが言っていたような気がする。

その内容からオセたちに偽物だとバレたってことは、ラウムのミス？

私のミスじゃないよね！

…いや、待て。

私のミスだ、ミスじゃないっていう問題じゃなくてっ。
偽物だとバレたら、私、どうなるわけ！？

パニくる私を他所に、オセは優しい口調で続けた。

「陛下がお亡くなりになったなど、私には些か信じがたいことです。それはカイル殿も同じ。たとえば、それが真実だとしても、そのことをラウム伯だけが知っているというのも、なにやら裏がありそうですね…。さて、このことについて、シャックス侯にもご意見をお聞きしましょう」

言っと、オセはシャックスの部屋の方へと振り返った。
つられて私も振り返る。

（何！？）

薄く扉が開いており、その僅かな隙間から橙色の瞳が覗いている。
シャックスだ。

考えてみれば、ここはシャックスの部屋の真ん前。
これほど近い廊下の騒ぎを気付かない人がいるとしたら、かなりの勢いで鈍い人だ。

幸い、シャックスは騒ぎに気が付いたらしく、扉を僅かに開いて廊下の様子をジッと窺っていたらしい。

（てか、見てないで助けようよ！ 私を！）

そりゃあ、シャックスにとって魔王の偽物である私なんかを助ける義理はないのかもしれないけれどさ。

（でも！あんたのゼリーを食べてあげた仲じゃん！）

あの一見あやしげなゼリーを！
と、シャックスを恨めしく思う。

ジト目で思いっきり見やってやると、シャックスはいかにも致し方がないという態度で、廊下に出てきた。

目付きの悪い顔が、一同を見渡す。

「我は、陛下はご無事だと思う。おそらくラウム伯の手によって、サマエル草で魔力を封じられ、どこかに閉じ込められているのだろう」

シャックスの言葉に、オセも大きく頷く。

「わたしも同じ見解です」

「またラウム伯の悪戯か…」

「いいえ。ラウム伯のいつもの悪戯にしては、些か目に余ります。」

もしや裏に何者かの影があるのかもしれませんが」

「あり得るな。ともあれ、我はもう少しラウム伯の身边を調べるつもりだ」

「では、わたしはラウム伯の使い魔の動きを」

「俺は…」

言い掛けて、カームは私を見やる。
碧い輝きを受けて、ドキリとする。

そして、人間嫌いな悪魔は意地の悪い笑みを浮かべ、すうっと、腕を私の方に伸ばした。

「不本意ながら、俺はその人間をラウム伯の手から守ろう」

不本意って…と思ったが、まさか悪魔の護衛が付くとは驚きで、私は口を挟むことを忘れた。

バレたら殺されると思っていた。

だから、バレないようにと気を付けながら過ごしてきた。

なのに、いったいどういうわけだろう。
今はバレてホッとしている。

無事に人間界に戻る日も近いかも知れない。

俄然、頼もしく見えてきた悪魔たちを見つめて、私は小さい喜びを胸に抱いたのだった。

16 名前

あちこちの悪魔にバレまくった日の翌朝。

食事を取っている私の横で、ラウムが頬に手を当てて首を傾げた。

「今日もオセ様はご用がおりだそうです」

「…ということは？」

「今日も執務はございません」

私はこっそりガッツポーズを取った。

魔王の何が大変か、って？

そりゃあ、魔王らしく執務をすることだ。

ちよつとでも間違えたら、いけないような気がして、ものすごく気が重かったのだ。

（オセにバレて良かったなあ〜）

そして、オセがラウムと違って、偽物に執務を任せるような常識ではなかったということに感謝する。

「おかしいですわね…」

あちこちでバレまくっていることなど、露とも知らないラウムは、右に傾けた頭を左に傾け直す。

「いくらご親友が来られているからと言って、あの真面目なオセ様がこつも度々お休みなさるなんて…」

おそらくオセの『ご用』とは、ラウムの身辺調査だ。

オセが怪しい、ベリスが怪しい、カイクが、シャックスが…。

そう、他の悪魔たちを怪しんできたラウムが、今度は怪しまれる立場になっている。

ぶつちやけ、私には誰が怪しいのかすら分らない状態だ。

嘘を付かない悪魔なんて、嘘を付かない人間以上にいないような気がするから、誰を信じて良いのかわからない、サッパリ分らない。

だから、私はどの悪魔も安易には怪しまない。

そして、どの悪魔も完全には信じないようにしよう。

そう決意しながら、退室していくラウムの背を見送った。

ラウムの足音が聞こえなくなると、私はそつと部屋から抜け出した。

『お部屋でごゆっくりお過ごし下さい』と、ラウムには言われたが、ごゆっくりなどしている気分ではなかった。

完全に信じられる相手がないのなら、自分の足で動いて、自分の目で確かめなければならない。

と言っても、オセのようにラウムの使い魔を捕まえるなんて芸当はできないので、彼らに任せるべきところは任せておく。

(とりあえず、昨日のようにシャックスに会いに行ってみようかな)

なんとなく、彼らの中ではシャックスが一番権限があるっぽい。

爵位が『侯爵』だからだろうか。

公爵のベリスの方が上位なのだが、最後に見たベリスの様子を思い出して、ベリスを探そうという気にはなれなかった。

本物の魔王を捜してさまよう姿は、まるで迷子犬。

ベリスを頼りにしたら、自分まで迷子になりそうである。

その角を曲がればシャックスの部屋があるというところで、私は足を止めた。

廊下の端からこちらに向かってくるカイムの姿を見つけて、ちょ

っぱり複雑な顔になる。

（たしか……。護ってくれるんだよね……？）

昨日の話では確かそういうことになっていた気がする。
その時、カイルも私の姿を認めて、口元を緩めた。

その笑顔が、なんか胡散臭い。

（こいつ、ものすごく人間が嫌いなんだよね？）

ちゃんと護ってくれる気があるのか怪しいところである。

やっぱり完全には信じてはいけない。

自分の身は自分で護るという覚悟でないと。

カイルは軽く片手を上げて、親しげに歩み寄ってきた。

「おう、人間。どうした？」

「人間って……。確かに人間だけど」

不満一杯の顔を見ると、カイルは笑った。

「名前、なんて言うんだ？」

「名前？ 私の？」

カイルが頷いたので、名前を答えようとして、私は眉を歪めた。

（あれ？）

そう言えば、と首を捻る。

「私、名前なんだっけ？」

「は？」

「忘れちゃったみたい」

「馬鹿か、お前。自分の名前だろ」

「そうなんだけど……。うーん」

「冗談ではない。

マジで思い出せないから、自分でも驚きだ。

困ったように長身のカイムを見上げると、カイムは呆れきった顔をしていた。

当然だ。

私が彼でも呆れてしまう。

「ちょっと待って。今、思い出すから……」

むむむっ、と低く唸り声をあげる私。

思い出そうと、すればするほど、頭の中が空っぽになっていく。そんな感じだった。

ふと、私は口元に手を置いた。
そういえば、と思う。

「私って、人間界でどうやって暮らしていたんだろう?」

素朴な疑問。

まさにそんな感じに私は、ふと浮かんできた疑問を口にする。

「高校生だった記憶はあるんだけど、それ以外のことは思い出せない。…なんでだろう?」

父親はいたような気がするが、母親はいた気がしない。

兄が二人いたような気がするが、ハッキリいたと言い切れる自信はない。

それから、友達がいた。

長い黒髪を二つお下げにして、いつも大きな瞳で私のことを見つめてくる少女が…。

友達？

あの子は本当に友達だったんだろうか…？

「お前って…」

呆れ声が頭上に降ってきて、私はカイムを見上げた。
彼は、やれやれ、と苦笑を漏らす。

「ホント変な人間だな」

「……………」

この時ばかりは言い返せないの、黙っていると、頭をくしゃりと撫でられた。

「いつから名前を思い出せないんだ？ 他に思い出せないことは？
逆に何を覚えているんだ？」

「……」

「もっと不安がったらどうだ。突然魔界に連れてこられたんだろ？
帰りたいと泣き喚いたっていいはずだ」

これは心配してくれているのだろうか？

嫌いなはずの人間があまりにも間抜けで、無害そうで、哀れで、
それで心配になってきたというわけだろうか。

「ほら、泣け泣け。今なら胸を貸してやろう」

「いらない…。べつに、泣きたくないから…」

カイルの言うとおり、いきなり魔界に連れてこられたわけで、自
分の名前すら忘れてしまった私は不安たっぷりなはずなのだけど。

どうしてだろうか。

なぜかそういう気分にはなれなかった。

17 密書

シャックスの部屋の前。

その扉を叩こうと、手を伸ばした時、まるで自動ドアのように扉が開き、中から目付きの悪い悪魔が飛び出してきた。

とんつ、と躰がぶつかる。

私も驚いたが、シャックスも驚いたようで、僅かに瞳を開く。そして、その驚きを隠すように愛想のない挨拶をする。

「これはこれは陛下もどきさん」

「シャックスさん、何か分かった？」

対抗して、わざとらしく『さん』付けで返してやれば、シャックスの細眉がピクリと跳ねた。

無言になった彼に代わって答えたのは、なぜかシャックスの部屋から現れたオセだ。

どうやらオセは自分が調査したことをシャックスに報告していたらしい。

「ラウム伯の部屋から、このような物を」

「なんだ？ 手紙か？」

怪訝な声が響き、私に差し出された紙切れを、カイムの手が横から攫っていった。

ちよっぴりムツとする。

だけど、すぐにカイムの表情が驚きに変わったので、私は不満を述べる暇が無かった。

「これは…」

「何？ どうしたの？」

「ストラス殿下からの密書だ」

（誰からの何？）

首を傾げてから、ふっと思いついた。

先王の王子で、シトリが王位を継いだことに不満を持っている人物だ。

「具体的にはなんて書いてあるの？ 読んで！」

「シトリ陛下を殺し、ストラス殿下にその王位を差し出せば、公爵地位とシトリ陛下の亡骸をやる…」と」

クシャリ、と、カイムの手の中で小さな悲鳴が上がる。

オセが慌てて、カイムから密書を取り上げた。

ラウムとストラスとの繋がりを明かす大切な物を破られては大変だ。

「…なるほどね、ラウムは公爵地位が欲しくてストラスって奴と手を組んだわけだ」

私は腕を組みながら、しみじみと言う。
ところが、三人は揃って首を横に振った。

「公爵位ではなく。陛下のお体が目当てだと思いますよ」

「我とて、ストラス殿下にそう誘われれば容易には断れない。
いや、殿下が我に声を掛けて下さっていれば、ラウム伯よりもっと
うまく事を運んだだろうに」

（何だって、シャックス？）

「もしも陛下の体が貰えとしたり、俺ならガラスケースに入れて、
毎日眺めるな」

（はい？）

「わたしなら都合の良い魂を入れて、生産機械のように執務を行っていただきます」

「はははっ。何だよ、それ。ホント夢がないよな、オセは」

「そんなことないですよ」

（いやあーっ。なんなのこの悪魔たちっ！ 夢がどうのこうのっていう問題じゃないよ。君たちの思考回路はどうなっているんですかっ！……！）

ガラスケースの中に入れられるのも、生産機械みたいになっちゃうのも、絶対に無理！

嫌過ぎるっ！

（っーか、君らの王様なんでしょ？ 敬いなさいよ。なんで、そんな、みんながみんな、体目当てなんだ！）

うつかりベリスに押し倒された時のことを思い出した。
あれはあれで立派に体目当てな行為だと思う。

冗談はさておき。

表情を真顔に戻すと、ぱちん、と拳を己の手のひらに打ち付けながら、カイクが眼を強く輝かせた。

「あの女をとつ捕まえてやる！」

「ええ、当然です」

オセも強く頷く。

だが、すぐにその顔を顰め、ですが、と続けた。

「陛下の身が心配です。あの方は、追い詰められると何をしてくるか分からない方ですから」

確かに、と思う。

私はラウムのことをそんなに知らないけれど、ここ数日間、彼女と接して感じたことがある。

なんというか、極端だ。

思い込みが激しいというか、感情が突っ走っているというか。

一度、激した彼女が、不自然なほど急に態度を変えたことがあった。

うまく言えないけれど、そういうところに彼女の心の不安定さを感じた。

『追い詰められると何をしでかすか分からない』

まさにオセに言葉通りだと思ったのだ。

魔王シトリを心配するオセに振り返った。

「魔王のことは、ベリスが捜しているよ」

「ベリス公が？」

「うん。捜すって言うていたし…。もしかしたら、もう見つけたかも」

これは希望。

無事に迷子犬が飼い主のもとに帰れるといいなあ、って感じの。

だけど、私の言葉を真に受けて、シャックスが頷く。

「ならば、ベリス公の気配を追う。生死の定かではない陛下より、ベリス公の気配の方が追いやすい」

ぱちりと、シャックスは瞼を閉ざした。
そして、そのままジッと動かなくなってしまった。

何をしているんだろうか、と小首を傾げた私に、カイクが自分の唇に人差し指を押し当てた。

「え？ 何？」

「少し静かにしてる。ああやって気配を追っているんだ」

「ああ。なるほど」

何かなるほどなのか、サッパリだが、とりあえず頷いておく。
しばらく、じっと待っていると、あちらだ、とシャックスが呟くように言い放った。

「あちらって？」

私の問いを華麗にスルーして、三人の悪魔は顔を見合わせ、頷き合うと、サッと踵を返した。

城の外へ出るのだと言う。

慌てて、私も彼らの背を追った。

18 戦闘開始

「あの女、ぶっ殺す！」

実に悪魔らしい物騒な言葉である。

オセから一通りの事情を聞くと、予想に寸分違わずベリスは吼えた。

怒りに顔を赤くしているベリスに私は、それで？ と尋ねた。

「魔王は見つかったの？」

魔王そっくりな私の顔を見て、毒気を抜かれたのか、ベリスは幼子みたいに、こくりと頷く。

「ああ、こつちだ」

先に立ってベリスが歩き出したので、私たちも足を進める。

魔王城から出てすぐのところに薄暗い森がある。

紫色の霧が掛かっているから、ますます暗く、そして、陰気に見える。

その森の中を進むと、やがて背の高い建物を見付けた。

ベリスはその扉の前で足を止めた。

「ここ、私が召喚された場所だ」

「そうなのか？」

零した言葉を拾って答えてくれたのはカームだった。
彼を仰ぎ見て頷けば、彼は神妙な表情を浮かべた。

「ここは教会だ」

「え。魔界にも教会があるの？」

「ああ。だが、神を信仰する場ではない。俺たち悪魔が等しく崇め奉る方は、皇帝陛下だ」

魔界の皇帝とは、多くの魔王を束ねているという存在のことだ。

通りで、と思う。

建物の中には十字架が一つもなかったわけだ。

神ではなく、悪魔の皇帝を信仰している場所だと聞いて納得する。

悪魔たちの教会の入り口の扉の前に立つと、ベリスはそこに両手を着いて息を吐いた。

「この中に陛下はいらっしゃる」

「その扉、開かないの？」

扉に両手を着いた格好で頂垂れているベリスに、私は首を傾げる。ベリスは頷くと、僅かに上方を指差した。

「これを見る」

悪魔たちが息を呑む音が聞こえた。

「この紋章は…」

扉に大きく描かれた紋章。

悪魔たちは愕然としてそれを見つめている。

「ストラス殿下のものだ。これが描かれている限り、この扉は俺たちには開けられない」

「ベリスでも？」

「試してみたが…」

ベリスは頭を左右に振る。

「殿下を上回る力の持ち主でなければ不可能だ。くそっ！　この中にいらっしやると分かっているのに！」

ガツン、と壁に拳を打ち付けて、ベリスは俯いた。

「この上はラウム伯を問い詰めるしかない。彼女がこの扉にストラス殿下の紋章の力を使い、封印を施したのであれば、おそらく彼女には扉を開けることができるはず」

「できなきゃ、殺す！」

できても殺すのではないかと思う剣幕だ。

私はベリスを見やり、それから、ハッとして振り返った。

足音を忍ばせて近付いてきた影に、誰よりも早く気が付いたのだ。

影。

彼女だ。

「ラウム」

「何！」

クスクスと笑い声が響いた。
すうっと姿を現せたのは、やはりラウムで、彼女は一同を見渡し
て冷やかに言い放った。

「何ですか？ 騒がしいですわ」

「ぶっ殺す！」

「まあ、怖い！」

ラウムの顔は変わらず笑顔だ。
目を細めて、口元を横に引いている。

「ラウム伯、貴女の企みはすべてお見通しだ。貴女の後ろにストラ
ス殿下がいることも。そして、その扉の向こうに本物の陛下が
いるのである」

「ふふつ。その通りですわ」

シャックスの言葉を受けて、ラウムの瞳が怪しげに光った。

彼女は笑う。
不自然に。

「バレてしまつては致し方ありません。せめて、最後の足掻きをさせて頂きます！」

ラウムの輪郭がぼやけた。

彼女の体は変形し、みるみるうちに巨大な翼を持つ獣の姿になった。

獣。

…いや、違う。鴉だ。

闇よりもなお暗き鳥。

赤い眼をギラギラさせてこちらを見下ろしている。

バサリ、と、すぐ近くで音がして、私はベリスを振り返る。

彼はマントを脱ぎ捨て、鼻を軽く鳴らした。

「俺がやろつ」

ベリスは鞘から大剣を抜き、真っ直ぐラウムに向かって構えた。
低くしゃがれた声が響く。

「ベリス公。相手として不足はない！」

それがラウムの声だと気が付くのに、僅かな間を必要とした。

鴉の嘴から響いてきた声は、ひどくしゃがれていて、とても女の子の声とは思えない響きだったからだ。

戦う気満々のラウムに対して、ベリスは口笛を吹いた。

（なんて悠長な！）

そう思った時、どこからともなく蹄の音が聞こえてきて、やがて血のように赤い馬が姿を現した。

ひらりと、その背に乗ると、ベリスは片手で手綱を操り、空を駆けた。

ラウムに向かって大剣を振り下ろす。

炎が舞う。

それはベリスの大剣から現れたもので、ラウムの体を包み込むように襲った。

「ぐはぁーっ」

苦しげに呻くと、仕返しとばかりにラウムは翼を羽ばたかせた。
黒い羽がナイフのようにベリスを襲う。

だが、ベリスはそれらをすべて大剣で薙ぎ払うと、再び炎を生み出した。

「喰らえっ！」

それは、ベリスの炎がラウムに襲いかかるのと、ほぼ同時だった。

ラウムも嘴を大きく開き、咽の奥から稲妻を吐き出す。

稲妻は炎を突き抜けて、ベリスを貫いた。

「ベリス！」

私は思わず悲鳴を上げた。

光の剣が彼の身体を串刺しにしたように見えたからだ。

だけど、心配はいらなかったようで、ベリスは頭を緩やかに振ると、けつ、と不敵な笑みを浮かべた。

「少しはやるようだな。こっちも本気になってやるぜ！」

吐き捨てるように言うと、ベリスは赤い馬の脇腹を蹴り、ラウムに向かって駆けた。

「死ねっ！」

大きく振り上げられた剣。

今までよりも一段と大きな炎を纏い、それは今にもラウムに振り下ろされようとしていた。

19 告白

不意に眩い光りが放たれた。

それはラウムの手のひらからで、複雑な模様がそこに浮かび上がっている。

「ストラス殿下の紋章か」

模様を見て、ベリスは怯んだ様子を見せた。

その隙を付き、ラウムは教会の扉へと駆け寄る。

彼女が手を触れさせると、あれほど固く閉ざされていた扉は難なく開き、彼女を内へと招いた。

「待て！」

追って、ベリスが建物の中に駆け込む。

更にその背を追って中に入った私は、黒い棺を盾にしたラウムの姿を見る。

ラウムの大きな瞳と目が合う。

その必死な瞳に私は言葉を失い、立ち尽くした。

「陛下はこの中にいらっしゃいます」

「何だと？」

「剣を降ろして下さい！」

気が付けば、いつの間に、ラウムの姿は鴉ではなく少女に戻っている。

その表情は険しく、ベリスに向かって声を荒げる。

「ベリス公、陛下の身がどうなっても構わないのですか！」

「くそっ」

カラン、とベリスの剣が鳴る。

彼の手から離れたそれは所在無く床に転がった。

「陛下をどうするつもりだ？」

「ストラス殿下はわたくしにお約束して下さいました。殿下が王位を継いだ暁には、陛下をわたくしに下さると。そのために陛下を殺し、先王陛下にその死をお知らせするように、と」

ラウムの瞳が揺れる。

常に微笑んでいた彼女が見せる、苦しげな表情だった。

「死体でも構わなかった！ 二度と陛下がわたくしに手を差し伸べてくださらなくとも、わたくしの傍にずっといてくださるのなら、それで構わなかった。陛下を……わたくしだけのものにしたかった」

ガクン、とラウムの膝が折れる。

両手を床に着き、頭を垂れる彼女を悪魔たちは静かに見守る。そして、静かにシャックスが口を開いた。

「その想いは分かるが、陛下が誰か一人のものになることはない。陛下自身がそれを望まぬ限り」

シャックスはベリスの横に立ち、真っ直ぐとラウムを見据えた。

「さあ、その棺を開けられよ」

俯き、ラウムは唇を噛みしめた。そして、両手で棺の蓋を握ると、持ち上げる。

ガタン、と音を立てて棺が開く。

棺の中には、私そっくりな魔王が眠っている……はずだった。

「え？」

私が声を上げると、悪魔たちからも同様に疑問の声を上げる。

「ラウム伯、これはいったいどういうことだ！」

棺の中は、空だったのだ。

今にもラウムに飛び掛かろうとするカイムの肩を押さえて、オセも険しい表情でラウムに問う。

「陛下はどちらにいらっしゃるのですか？」

彼女は棺の中に目を落とした。

すると、白い小さな光りのような物が、ふわふわと、棺の中から現れて、ラウムの手の中に収まる。

つうーっと、ラウムの頬に涙が伝った。

「どうして陛下を殺せましょうか。わたくしにできたことは、陛下

にサマエル草を吞ませ続けることのみ。飲み物に混ぜて、魔力を封じ、この棺に陛下を隠しました。けれど、永遠に隠し続けることはできません。いつかベリス公たちに知られ、陛下を取り上げられてしまう。ならば、わたくしの思い通りになる陛下を作り上げればいい。そう思い、再びサマエル草を陛下の口に含ませました」

「お前、陛下に何をしたんだ？」

ぐつと、ベリスの咽が鳴る。

その顔は既に答えを知っているかのように青ざめている。

「わたくしは陛下の記憶を操りました。魔王としての記憶を奪い、偽物の記憶を植え付けたのです」

「まさか…」

「陛下がベリス公たちに不信を抱き、遠ざけてくだされば、と願っていました。わたくしだけを傍に置き、わたくしだけに微笑んでくだされば、と」

「だから、あんなにもベリスたちを怪しいって言っていたの？」

私はベリスやシャックスの前に立ち、ラウムを見据えた。
彼女は、こくん、と頷く。

「これが陛下の魔力と記憶です」

ふわり、と、ラウムの手のひらから白い光りが浮かぶ。
水中に漂うように、ゆっくりと私の方へと飛んでくる。

やがてそれは私の額にぶつかって、すうっと頭の中へと消えていった。

「……」

そうか。

だからラウムの入れる紅茶やラウムから手渡された水はあんなにも辛かったのか。

最初に思ったことは、そんなこと。

おそらく魔力と記憶を封じ続けるために、サマエル草を飲み物に混ぜていたのだろう。

不思議と、怒りは湧いてこなかった。

許すとか、許さないとか、そういうこととも違う。

そこまで私が好きか、と少し呆れただけ。

私は眉を下げ、唇の端を持ち上げ、ラウムに視線を向けた。

「バカだね、あんたは…」

思い出した。
すべてを。

そして、思い返してみれば、植え付けられた記憶の中の友人は、ラウムだった。

長い黒髪を二つお下げにした可愛い少女。

魔界ではなく人間界で、悪魔ではなく人間、身分も地位も無ければ自分と彼女は、その偽物の記憶のように友人になれただろうか。

おそらくなれたはずだ。
誰よりも親しい友に。

だけど、それでも、私は彼女だけのものにはならなかっただろう。
彼女のことを大切に思うが、彼女だけが大切なわけではないからだ。

両手を地に着き、頭を下げるラウムに、私は淡く笑みを漏らした。

「もういいよ。許す」

「陛下」

諫める声に振り返って、今度は軽く苦笑し、頭を左右に振った。

「こうして私も無事なわけだし、魔力も記憶も戻った。ストラス兄上は困った方だが、あの方と争う気はない。オセがラウムの使い魔を捕らえてくれたおかげで、父上にも知られていないようだし、もういいだろう」

「しかし…」

言い募ろうとしたオセの言葉を遮るように、低く唸り、大きく伸び上がった。

高く高く腕を伸ばして、つまらないと、紫色の空に向かって、ぼやく。

「あーあ。五日間も人間ごっこやって疲れちゃったよ。とっとと城に戻るよ。んで、戻ったら、ラウム、お茶入れて。サマエル草抜きでね」

そう言って、彼女の方に振り返ると、ラウムが駆けて来て、左腕に抱きついた。

「陛下、陛下…」

涙に濡れる頬を拭って、彼女の右手を取る。
その手のひらに刻まれたストラスの紋章を、口付けを落として消してやる。

一件落着。

そう思った時だ。

不意に大声が上がった。

「あれ？ 胸は？ あの胸の膨らみは何だったんだ！」

ベリスである。

その横でシャックスが肩を竦めた。

「ベリス公は未だに我の嘘を信じていたのか」

「嘘って？」

きょとんとして、彼は隣を見やる。

「男が女に変化する奇病などない。陛下は元より女性だ」

「は？」

なんだってーっ、と絶叫が響く。
笑い声を上げる五人の悪魔たち。
知らないのはベリスばかりだ。

「陛下がお生まれになったのは、先王陛下がお二人の王子たちと親子の契約を済まされた後のことでした。陛下を後継にしたいと考えられた先王陛下は、陛下を王子として育てられたのです」

「故に、陛下が女性であることは極秘事項だ」

「わたくしはもちろん、カйм様もご存じのことですけどね」

「なんで俺は！」

「ベリス公はすぐに顔に出される故」

「だからって！」

「そして、いざ知られても、幼い頃からそのような奇病があると吹き込んでいれば、笑いのネタになる」

予期した通りの結果だったと、シャックスは満足げに言った。
ベリスはガックリ肩を落とす。

「ひどい…」

確かにひどい話だ。

そんなひどい話を信じてしまうヤツもどうかと思うが、その嘘のおかげで、私はベリスに胸を触られたのだ。

お前のせいかなぁ、と睨むと、シャックスの細い眉がピクリと動いた。

ふと、ラウムが腕を緩め、体を離れた。

そう言えば、と胸元から黒い封筒を取り出す。

「これは、大公殿下からの書状です。陛下宛で届いていましたわ」

「大公って…。ええっ！」

魔界で『大公』と呼ばれる人物は一人しかいない。
皇帝と同等の権力と実力を持った悪魔、アスタロトだ。

「なんでそれを早く言わないの！」

「だって、忘れていたんですわ。すっかりですわ」

ハートマークを振りまきながら、ラウムはにっこり言う。

「大丈夫ですわよ。二日前に届いたばかりですもの」

「二日！」

「陛下、とにかく中を確認してみましよう。急ぎ返書を送らなければ非礼になる内容かもしれません」

事の重大さを理解し、私と同じくらい青ざめてくれるのはオセだけだ。

そして、騒動の絶えない私の側に常にいてくれるのも、彼。

悪魔っていうのは、退屈に恐怖し、トラブルを歓迎するものだって言うけれど、私とオセはいつだって平穏を求めている。

（ホントに、もう勘弁して欲しい！）

私は黒い封筒を恐る恐る開いた。

そして、新たな嵐の訪れを予感しながら、文面に目を落としたのだった。

20 日常（後書き）

最後までお付き合い、ありがとうございます。

この小説は、もともとフリーゲームとして公開したオリジナルゲームを小説化したものです。

ですので、ネット上で検索して頂くと、同タイトルのゲームが出てくるかと思います。

合わせて楽しんでいただければ、と思っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933j/>

召喚魔王

2010年10月8日14時14分発行